令和５年度　第２回宮城県農村振興施策検討委員会

開催日時：令和５年１１月１０日（金）
開催場所：栗原市

議　事　録

宮城県　農政部　農山漁村なりわい課

目　次

１　開会　　Ｐ　１～　２

２　合同会社くりはらファーマーズラボ：　現地調査　　Ｐ　３～　８
（於：有限会社耕佑）

３　合同会社くりはらファーマーズラボ：　意見交換　　Ｐ　９～２３
（於：会席料理丸勝　）

４　多面的機能支払交付金事業、中山間地域等直接支払交付金事業：　　Ｐ２４～４２
峯地区環境を守る会、若柳蓬田集落協定　意見交換
（於：栗原市若柳多目的研修センター）

５　中山間地域等直接支払交付金事業：　現地調査　　Ｐ４３～４６
（於：若柳蓬田集落棚田）

１　開会

（栗原市へ向かうバス車中より）

事務局：令和５年度第２回宮城県農村振興施策検討委員会を開催させていただきます。開催に先立ちまして、農政部副部長の齋藤より一言挨拶申し上げます。

齋藤副部長：おはようございます。着座にて御挨拶させていただきます。

今日の天気ですけれども、午後から夕方にかけて雨がちょっと心配されます。朝は靄がかなり酷かったんですが、これも随分晴れまして、まずは滑り出し順調というところだと思っております。

改めまして、本日はお忙しい中、本年度第２回目になります農村振興施策検討委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、本県の農村振興に対しまして、御指導、御助言を賜わり、厚く御礼申し上げます。本検討委員会では、中山間地域等直接支払交付金、多面的機能支払交付金及びみやぎの地域資源保全活用支援事業の３つの施策について実施状況等を踏まえた検討を行うこととしております。

本日２回目の検討委員会になります。それぞれの施策の効果検証や評価等を実施していただくにあたりまして、各施策で活動している組織や、農村振興に取り組んでいる団体について現地調査と意見交換の場を設けさせていただきました。委員の皆様におかれましては、現地の取組状況を御視察、御確認いただきまして、意見交換の場で御意見、御助言をいただければ幸いでございます。

本日は改めましてよろしくお願いしたいと思います。

事務局：ありがとうございました。それでは私から本日の日程について説明させていただきます。本日の検討委員会では、栗原市において、交付金活用団体等を対象として現地調査をしていただくとともに、現地の構成員の方々との意見交換を予定しております。

本日は現地視察形式での委員会でございますが、委員・専門委員・事務局の他に、オブザーバーとして宮城県多面的機能支払推進協議会の担当者の方にも御一緒いただいておりますので、よろしくお願いいたします。

これより先、築館インターチェンジより東北自動車道を下りまして、１箇所目の栗原市一迫に向かいます。１箇所目の活動組織は、当委員会の対象事業ではありませんが、地域資源の活用や都市農村交流による関係人口の拡大に取り組む合同会社くりはらファーマーズラボとなります。到着は午前１０時頃を予定しております。

最初に合同会社くりはらファーマーズラボの代表である伊藤秀太様が代表取締役を務める有限会社耕佑にて現地調査を行います。有限会社耕佑で現地調査後にですね、昼食会場を兼ねております一迫の会席料理丸勝へ移動して、午前１１時より意見交換を行う予定としております。

意見交換後に昼食を挟みまして、午後は栗原市の若柳へ移動します。２箇所目は中山間地域等直接支払交付金事業に取り組む若柳蓬田集落協定と多面的機能支払交付金事業に取り組む峯地区環境を守る会との意見交換並びに現地調査となります。午後１時４０分頃に

1　開会

意見交換会場である栗原市若柳多目的研修センターに到着して、午後３時１０分頃まで意見交換を行う予定としております。意見交換終了後は、若柳蓬田集落協定が管理する棚田の現地調査を行います。

なお、栗原市若柳多目的研修センターでの意見交換会は、情報公開で進行することとしており、マスコミ及び一般の傍聴者がいらっしゃる場合がございますので、予め御了承ください。

全ての日程が終了後、県庁に戻りますが、築館インターチェンジから東北自動車道に乗車後、再び長者原サービスエリアで休憩をとりまして、仙台宮城インターチェンジで降車する行程としております。県庁到着は午後５時３０分頃を見込んでおりますが、交通事情や現地での進行具合により、多少前後する場合がありますので、御了承ください。

また本日使用します資料につきましては、お手元の当日配布資料一覧の通りでございます。不足などございましたら、説明の際にでも結構ですのでお申し出ください。

それでは現地調査先であります有限会社耕佑に到着するまで、今しばらくお待ちください。よろしくお願いいたします。

２　現地調査（栗原市：合同会社くりはらファーマーズラボ）

（有限会社耕佑より）

事務局：本日御説明いただきます、合同会社くりはらファーマーズラボ代表の伊藤様でございます。それでは伊藤代表、よろしくお願いいたします。

伊藤代表：皆様おはようございます。合同会社くりはらファーマーズラボ代表の伊藤と申します。ファーマーズラボの傍らというか、むしろこちらがメインになりますが、有限会社耕佑という会社をやっておりますので、耕佑の取組について時間を頂戴して説明させていただければと思います。よろしくお願いいたします。

築館インターチェンジからこちらに降りてくると、この辺はずっと山道で、いつイノシシやクマが出てもおかしくないような所です。耕佑という会社は、お配りしている資料は後で見ていただければと思いますが、こちらの地域に設立して今年で２５年になる会社です。設立前の平成４年頃から、地域で水田をやっていた当時４０歳前後の農家達で作った組織になります。

皆さんが車から御覧になって分かるとおり、まさに中山間地域というような、ここは一迫の南沢地区という所で、本当に中山間地域の課題が全て体現されているような地域です。見てのとおり田んぼは基盤整備をしていないので形が悪いです。この辺の見える所はまだ良い方です。あと、草刈りをしようと思えば田んぼより畦畔の方が大きい所も多く、なかなか作業が大変です。こちらの南側の沢は大崎市になりますが、南側の沢と西側の沢でイノシシ除けのフェンスが設置されました。おそらく、県の事業だと思います。あのお陰でこの地域にイノシシが集まってきて大変な状況です。

そういった中山間地域で、当時「田んぼ作業をみんなでやろう」ということで４軒の農家が組んで作ったのが耕佑です。豚や牛を飼っていたり、タバコ農家をやっていた４人の農家達が、稲作の作業を削るということで作ったのが、春と秋だけ凄く忙しいので、「１年間通して仕事をしたい」ということで、当時愛知県に「イチゴの農業をしたい」、「水耕栽培したい」と言って視察に行って、そこで見たレタスの水耕栽培を「これやりたい」ということで切り替えて、水耕栽培を始めました。それが平成５年か６年頃の話で、そこから法人にしたのは平成１０年で、３０年ぐらい水耕栽培の葉物栽培をやっている会社になります。ちょっとずつ取引が増えていくにしたがってハウスを増やして、今はこのスタイルのハウスが１０棟あって、大体３０人から４０人ぐらい働いている会社になっております。

私自身、実はこの地域とは縁もゆかりもなくて、家は栗原市栗駒にあります。元々はＪＡの職員でした。ＪＡの職員として耕佑と関わりがあって、１１年前にこちらの会社に転職させてもらい、一昨年から代表をやっています。最近では少しずつ出てきましたが、農業法人で血縁じゃない方に継承するというのも珍しいかなと思っています。うちの会社の場合、４人で立ち上げた会社ですが、今では会社の経営に４軒とも関わっていなくて、私と常務の２人で主にやっています。２人とも一迫の人間ですらないという状況の中でやらせてもらっています。

２　現地調査（栗原市：合同会社くりはらファーマーズラボ）

人繰りで言うと、人の問題はずっと課題で、ずっと役員とパートさん達でやっていましたが、そういうスタイルが取れなくなってきているので、特定技能の外国人が２名、ネパールから来てここに寝泊まりしながら働いています。そこにプラスしてたまたま栗原市内にネパール人向けの日本語学校ができたので、そこからネパールの方々に毎日送迎して来てもらって、ネパール人チームが大体１０人ぐらいになっています。あとは、後程説明しますが障がい者雇用にも少し力を入れていて、パートが集まらない分をカバーしています。あとは若い２０代の正社員とかが増えてきています。なので、世代もだいぶ変わりながら経営しているという形になっております。次に中の施設を説明したいと思います。

うちの会社は、グローバルギャップという農場の認証を取っています。工業でいうとＩＳＯとかそういったものに近いのですが、「安全で安心な農産物を生産しています」「労働者にとっても安全です」「地域環境にとっても安全です」という国際認証を取っています。その一環で、必ず帽子を被っていただく、中に入る際にはアルコール消毒していただくといったルールがいくつかありますので、そちらを守っていただければと思います。帽子は髪の毛が落ちないように被るという目的です。コロナ禍になって、キャップや手の消毒も皆さん当たり前にするようになりましたけど、うちの会社は１０年以上前からやっていて、グローバルギャップも来年で１１年目になります。宮城県内では早い段階からそういった認証にも取り組んでいます。県内だと三番以内という話を聞いております。

（サラダ菜のハウス内より）

伊藤代表：ここが、一番大きなハウスでサラダ菜のハウスになります。水耕栽培なので、もちろん土は使わず水で作っています。このように、１ｃｍ無いぐらいの浅いベッドの上を水が流れていて、こちらが高くて向こうが少し低くなっていますので、緩慢に水が流れていて、その水がまた循環してくるというスタイルになります。同じ水がずっと循環しながら野菜を育てるという形になります。水自体は井戸水を使っています。ここだと５０から６０ｍぐらい掘った地下水を汲み上げていて、そこに肥料を自動で添加しています。野菜が吸うと肥料が薄くなるので、そうすると肥料が自動で足されます。野菜が水を吸って蒸散すると水も減ってくるので、水が減ったら地下にあるタンクにまた水が足されるという形で、割と人の手が掛からずに循環するという形になっています。ここでは、説明しにくいので下のサンチュのハウスに行ってまた説明させていただきます。

うちの会社の野菜は、サンチュは焼肉屋にも出荷しています。レタス系というかサラダ菜、サンチュ、ミツバは某大手スーパーのプライベートブランドもやっていて、東北、関東、関西にも一部出しています。特にコロナ禍で某大手スーパーとの繋がりが強くなって、某大手スーパーの分が凄く多いんですけども、そうなってくるとここの作業が凄く大事で、痛んでいる葉っぱや、これから痛むであろう葉っぱを全部ここでトリミングします。この作業が凄く大事で、スーパーに並ぶまでに３日以上掛かるものもあるので、ちょっとでも痛む可能性があれば取るようにしています。ウレタンが付いていますが、ウレタン付きで出すことで、まだ水を吸えるので鮮度が保たれています。あと鮮度保持として、

呼吸をコントロールするフィルムを使っているので、それによって長持ちさせながら流通しています。東北というか仙台圏では捌ききれない量を作っているので、関東や、サンチュでは関西まで出荷していて、このトリミング作業が凄く大事な作業になるので、丁寧にやっています。

（サンチュのハウス内より）

伊藤代表：こちらがサンチュのハウスになります。焼肉屋で肉を巻いたり、最近ですとサラダにもよく使われています。先程ちゃんと見えなかったと思いますが、ベッドの上はこのように、水がゆっくり流れてそれが循環するというスタイルになっています。今閉まっていますが、このカーテンは防温カーテンといって、中の温度が逃げないようにするカーテンで、天気が良ければもうとっくに開いていて、自動なので温度で開いて夕方３時ぐらいに閉まって、日中温まったハウスの温度を外に逃がさない機能があります。この上にもカーテンがあって、遮光カーテンといいまして、保温カーテンと逆で遮光カーテンは日光を遮ってハウスの温度が上がり過ぎないように、夏場とか冬場でも日中だと上がりますけど、コントロールしています。あとは外のカーテンも自動で、今年自動化したもので温度コントロールが出来るようになっています。どうしてそうしているかというと、地域の農家達で栽培している時は、例えば朝起きたらハウスに来て作業して、朝ご飯食べてまた来るということが出来ましたが、私は家から２０分以上掛かるのでそれが出来ないし、地元の人間が減ってきているのでそういう作業がしづらくなってきているので、朝晩の管理を出来るだけ自動で出来るようにしています。法人化してサラリーマンみたいに農業をやる方々が多くなってきているので、それでも管理できるように、少しお金を掛けて自動化に取り組んでいます。

ハウスが狭いので見にくいですが、このように地下にタンクが入っていまして、どのハウスもベッドの水が循環して、排水したものがまた戻るという形になっています。ここのハウスでは全部で２０棟ぐらいの水が全部繋がれていて、それが地下タンクに入っていて、このタンクの水が循環しているので、凄く大事な水になっています。この水をモニタリングしていて、こちらの機械で、自動で肥料をコントロールする形になっています。これが肥料の濃度を測定していて自動で水を循環しています。ここからタンクが覗けますけど、このジャバジャバいっているのが、わざとエアーをかましています。空気を入れることによって植物が酸欠にならないように、水の中に酸素を混ぜるということを自動でやっています。この方式は４０年ぐらい前からある水耕栽培のやり方で、本社は愛知ありますが、古き良きシステムだと思っています。システムとしてのコントロールは凄くシンプルな機械しか使っていないですし、パイプも普通に市販のものを使っていますし、地下の配管も塩ビ管で我々でも配管出来るような仕組みになっています。ですので、例えば何かエラーが起きた時でも、愛知から業者を呼ぶとかではなく、自分達で穴を掘って調べて直すことも可能な仕組みで、メンテナンスは凄くしやすいです。

一方で、今、施設園芸の技術が上がり過ぎていて、生産量が露地に比べれば我々でも３

割以上高いスペックで作れますが、その倍作れる農場も出てきているので、人件費の高騰と併せて、テクノロジーで解決している所には敵わないなっていう危機感は非常に持っています。自分達で直せるので凄く触りやすいですし、ここ２０年くらい使っていて、大震災も経験しても大丈夫なハウスですけど、一方で、そういうテクノロジーが進んでいる農場に対しては、今悩んでいます。

話があっちこっちに行って申し訳ないのですが、最初に種を蒔いてから、しばらくはこの１２０個穴が開いているもので養生します。密植にして育ちを良くしています。この苗を１６個の穴に植え替えます。サンチュに関しては、ある程度育ったら１枚１枚手で収穫しています。採った後はわさびみたいに傷がつきますが、１枚１枚採っていくという形になります。収穫は大体うちの社員ですと１時間で１，０００枚が基準になっています。手で摘むサンチュなので、その技術がある農場しか出来ないので、そういう意味では競争力としては強みかなとは思っています。手で摘むサンチュをうちでは５万枚から１０万枚出荷できます。それが東北の焼肉屋や某大手スーパーの関西まで含めたスーパーに出荷しているという形になります。宮城県内でサンチュを食べれば、うちのサンチュである確率がかなり高いかなと思います。皆さん知らずに食べていただいていると思います。焼肉チェーン店でも、当社のサンチュを使っていただいています。

そういった形で栽培していて、農場ではサンチュが今一番メインで大きくて、サンチュ、サラダ菜、ミツバが三本柱で、プラスアルファでケールやホワイトセロリという新しめの葉物も栽培しています。サンチュが半分以上で、売り上げも６割以上サンチュですが、正直コロナ前はサンチュにどんどん一極集中していこうと思っていました。ちょっと話としては複雑ですが、簡単に言うと東京の焼肉屋さんにサンチュを送っておけば、とりあえずしばらく稼げると思っていました。東京の焼肉屋向けのサンチュをちょっと増やしていましたが、コロナ禍でそこが最初にゼロになりました。そのときに、それまで少量生産していた野菜や、サラダ菜、ミツバとか、一般の人が手に取りやすい、この辺でも売りやすい野菜がうちの会社を救ったのと、あとはスーパーに出すのを止めようかと思っていましたが、某大手スーパーに沢山買ってもらいました。毎月肉の日っていうセールを入れてもらったり、プライベートブランドをやっていたので優先順位を上げてもらいました。２月とか２８日までしかないですけど肉の日をやってもらったり、無理矢理に買ってもらって何とかコロナ禍を乗り越えることが出来たので、リスクヘッジの面で一極集中は危険だなというのをコロナで学んだ経緯があります。ですので、繰り返しになりますが、地元で買ってもらう野菜として流通するものと、あとは某大手スーパーとか、大手飲食チェーンとも取引させていただきながら、上手くバランスを取りながらやれれば良いのかなと思っています。さっき皆さんが最初に入ったハウスはサラダ菜ですが、サラダ菜は今の時期すごく余ります。レタスが沢山出てくるので、サラダ菜を買う人が居なくなります。今やってもらっているのが、某大手飲食チェーンが運営するしゃぶしゃぶの食べ放題の店がありますが、そこでサラダ菜をフェアみたいにして入れてもらっています。困った時期に事前に相談すれば、そういうこともやってもらえるので、そういう意味では、地元の取引と大手との取引とどちらも大事かなと思っています。野菜のバイヤーさんが肉は凍らせてお

けば良いから割と手に入りやすいと言っていました。肉は沢山買って来て凍らせておけるけど、凍らせられない葉物野菜は凄く苦労していると言っています。野菜の値段が凄く動いたり、災害があって物が無くなることがあるので、レストランのメニューに入れたものが確保できないことが起こるので、多少値段が張っても、安定供給してくれるところと取引を優先しないといけないそうです。特に店舗数の多い飲食チェーンでは、昔「鍋フェア」として鍋に本当にちょっとだけ、ひとつまみミツバを入れるだけだったのに、全国のミツバ農家がパンクしたこともあったので、店舗数が多いところはそういう苦労もあるんだなと取引していく中で学ばせていただきました。

今、課題として、物凄く夏が暑いことと、コロナで地域、地元で売るものを増やしたいということがあって、それを解決するために、パッキングするための専用のセンターと、あとは舞茸をやることになっていて、そこもちょっと今日見ていただきたいので、すいません移動ばかりで申し訳ないですけど移動します。

（パッケージ加工施設内より）

伊藤代表：ここ数年夏が暑すぎて、その包装作業の段階で野菜が傷んでいくことがあって、品質を守れないなということで、昨年、倉庫の中に壁を貼ってパックするためだけの場所を作りました。野菜は全部ここに集中させてパッキングをしています。温度管理を大体エアコンで涼しい状態にして、本当はコールドチェーンといってずっと１０℃ぐらいで流通させれば良いのですが、そこまでは無理なので、一旦冷蔵庫に野菜を入れて、涼しい環境の中でパッケージして送り出すということを昨年の夏からやっています。大分夏場のクレームは減りました。今年はちょっと夏が長すぎたのでクレームが増えましたけど、パッケージ段階でのエラーは大分減ったかなと思っています。

（舞茸の栽培施設内より）

ちょっとまだ片付いてないので汚いですが、本当に先月稼働したばかりなので御容赦ください。ここから移動した後にスライドを使って詳しく説明はしますが、くりはらファーマーズラボという会社をやっていまして、くりはらファーマーズプロジェクトという名前で地域の農産物を外に出したり、人を栗原に呼んでくるという活動を８年、９年ぐらいやっています。その中で色んな生産者と知り合いました。キノコやレンコンをやっている色んな方々と知り合って、その方々を主役にしたイベントを開催したりしています。その中の１人に舞茸を作られている方がいらっしゃったんですけど、４、５年前に「もう辞める」、「舞茸、しんどい」と言われました。もう高齢で辞めたいって言われた時に、栗原で舞茸を作っていたのはその方だけだったので、栗原産の舞茸が無くなるのを防ぎたいと思って、当時、私は代表じゃなかったので、当時の社長と相談しながら「うちで事業継承できないかな」ということで取り組んで、今年ここに完成しました。その間コロナがあったり、代表が代わったり大変でした。この舞茸工場は、栗原市志波姫の舞茸屋さんと、登米

市の佐沼にある舞茸屋さん、一関市の川崎にある舞茸屋さんがほぼ同時に廃業するということで、それをバラバラにしてここに組み立て直した舞茸工場です。なので、３社を事業継承させてもらったことになります。３社のノウハウを集結させて、機械も譲っていただいたものが多くあります。

栗原市から舞茸が無くなるのがもったいないという綺麗な話もありますが、耕佑が元々作っていた葉物野菜は、極端な話をいうと別に耕佑じゃなくても良いんです。「サンチュの味が特別違う」とあまり思わないですよね。うちの野菜はどちらかというとブラインドでも売れる野菜だと思っていて、一方で舞茸は、「ここの舞茸じゃなきゃダメだね」、「他と全然違う舞茸だね」という評価を得られるので、わざわざ人に選んで買ってもらう商品もあったら良いなという気持ちもあり、舞茸をやることになりました。なかなかそういう舞茸を作るのは大変ですけど、一応うちの社員を１人送りこんで２年半修業させたんですが、やっぱり場所が変わると水も空気も違うので難しいなっていう今の段階です。

そういった形で耕佑という会社は３０年前に地域の稲作農家達がこの地域で営農続けるために立ち上げた会社ですが、今は第三者の私が継承した状態で、地域で雇用を生むために農業を続けているという形になります。元々米で始まった会社ですが、米自体は、営農組合が法人化した会社で地域の人たちでやっています。まだみんな元気でいるから良いんですけど、「この会社将来どうしよう？」っていう悩みも個人的にはあるものの、今は米を離した状態で、野菜とキノコで経営しているという状況になります。あとは、くりはらファーマーズラボに視察に来ていただいたので、資料ベースで、移動してから座ってお話を聞いていただければと思います。ありがとうございます。

事務局：伊藤様、どうも御説明ありがとうございました。御質問等色々あるかと思うんですけれども、これからこの後の意見交換の場所に移らせていただきますので、御質問等はその場で御発言いただければと思います。それでは意見交換の会場である会席料理丸勝さんの方に移動しますので、バスに御乗車お願いいたします。では改めて伊藤様、ありがとうございました。

３　意見交換（栗原市：合同会社くりはらファーマーズラボ）

「令和５年度　第２回宮城県農村振興施策検討委員会」
（合同会社くりはらファーマーズラボ）

日時：令和５年１１月１０日（金）　午前１１時から正午まで
場所：会席料理丸勝

司会：これより令和５年度第２回宮城県農村振興施策検討委員会の意見交換会を開催いたします。本日意見交換会の司会を務めさせていただきます農山漁村なりわい課の立石と申します。よろしくお願いいたします。

はじめに、人事異動に伴いまして、今回より新たに御就任された専門委員がいらっしゃいますので御紹介させていただきます。

前　浅野直明専門委員に代わりまして、宮城県土地改良事業団体連合会　専務理事　千葉伸裕様が新たに専門委員に御就任されております。どうぞよろしくお願いいたします。

千葉専門委員：宮城県土地改良事業団体連合会の専務の千葉でございます。この８月に組織の中で役員改選がございまして、専務の職を拝任させていただいております。本日、この日本型直接支払制度、これにつきましては、やはり持続可能な農村に向けまして、なくてはならない施策の一つというふうに認識してございますので、この制度がどのように実際現場で活用されているかどうか勉強させていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：ありがとうございました。なお、その他の本検討委員会委員並びに専門委員の皆様、本県職員及び宮城県多面的機能支払推進協議会事務局員の紹介につきましては、お手元の出席者名簿に代えさせていただきますので御了承ください。

つづきまして、現地の活動組織からの出席者の方を御紹介いたします。

先程の現地調査でもお世話になりました、合同会社くりはらファーマーズラボ　代表伊藤秀太様でございます。

伊藤代表：伊藤です。引き続きよろしくお願いいたします。

司会：それでは議題に入る前に、定足数について御報告をいたします。本委員会の定足数は委員の半数以上となっておりますが、本日は委員６名の御出席をいただいておりますので、農村振興施策検討委員会条例第５条第２項の規定によりまして、本日の会議が成立していることを御報告いたします。

また、本委員会は、県の情報公開条例に基づき公開で開催しております。本日の議事録は後日公表となりますので御承知をいただければと思います。

なお、議事録作成のため、本日の会議はＩＣレコーダーにより録音をさせていただきます。御発言いただく際、所属とお名前を仰っていただき、大きな声で御発言くださるよう御協力をお願いいたします。

３　意見交換（栗原市：合同会社くりはらファーマーズラボ）

それでは、これより、意見交換に入ってまいります。農村振興施策検討委員会条例第５条第１項の規定により、委員長が議長となるよう定められておりますので、ここからの進行は伊藤委員長にお願いしたいと思います。

伊藤委員長、どうぞよろしくお願いいたします。

伊藤委員長：それではこれより議長を務めさせていただきます。皆様御協力のほどよろしくお願いいたします。

本日は、地域資源の活用とか都市農村交流によって、農村振興に取り組まれている合同会社くりはらファーマーズラボの伊藤代表に御参加いただいて、先程有限会社耕佑の現地視察をさせていただきました。この場では先程の視察の際でも話がありましたけれども、くりはらファーマーズラボの取組について主に説明していただき、その後で意見交換をさせていただきたいと思います。意見交換では、先程の耕佑の取組も含めて皆さんから御意見・御質問等をいただければと思います。

それではこれから１５分ほど、伊藤秀太代表に取組の説明をお願いいたします。

伊藤代表：では、先程に引き続きまして私の方から説明させていただきます。資料がちょっと多いですが、１０分、１５分ぐらいで説明させていただいて、意見交換で色々な話ができればと思っております。お手元に資料の抜粋を配っておりますので、そちらも御覧いただきながらと思います。

それでは、説明させていただきます。先程の耕佑は沢山見ていただいたので説明はしませんけれども、中山間地で田んぼにプラスアルファでやっていた施設園芸が、今は地元の手を離れて我々と外国人も含めて経営しているという状況になっています。次の課題は田んぼの法人と耕佑をどうミックスさせていくか。地元の人たちと一緒に経営をしたのは私だけになってしまっているので、私がいなくなってしまうと、地域の元営農組合だった法人との関わり合いも薄くなると思いますので、ここから５年ぐらいでどういう形で地域の田んぼと畑も含めて守っていくかが地域全体の課題だと思っています。耕佑の継続もですが、どちらも含めて今後の課題になっていくのかなと思っております。

先程の耕佑は南沢という地域にフォーカスして、地域をどうやっていくかという文脈で生まれた会社で、我々も今、地域で営農を継続するにはどうしたら良いかということに重きを置いてやっております。

一方で、くりはらファーマーズラボは栗原市の全体に目を向けていて、私は２０１３年に耕佑に入ったんですが、２０１４年からキリンビールさんの勉強会に参加して、一企業が経営を継続していくだけではなく、「農業界はやっぱり地域全体を考えないと地域の継続がない」というのを学んで、地域の農業を良くしようというプロジェクトを開始しました。何も分かってない状態から始めたので、凄く苦労もしたのですが、やはり栗原で生まれ育って、田んぼや畑を育てて管理するということが如何に重要かというのを本当に身に沁みて感じています。

地域の人の話を聞いて学んだことですが、栗原は３本大きな川が流れていて、そこを江

戸時代に治水したことによって水田地帯として発達した地域だと聞きました。我々の迫川の後には北上川と合流していて石巻まで繋がっていますが、栗原の田んぼが荒れて、河川が荒れていくと、結局登米の田んぼも荒れて石巻の田んぼも荒れるという形になります。なので、我々はきちんと農地を守ることで治水することが凄く大事だというのを本当に感じています。それをやるのは誰かというと、行政がお金を払って建設会社さんが草刈もしていますが、そもそも生業として農業をやっている人達がこれまでやってきているので、生業としての農業をきちんと地域に残さなきゃいけないと活動してきたのがくりはらファーマーズです。一昨年法人にして、くりはらファーマーズラボになりましたが、地域で農業が職業の選択肢として当たり前になることが目標だと思っています。私は今４２歳ですけど、親から「農業なんかやるな」と言われてきました。うちの親は公務員で農業じゃなくて、祖父はやっていましたが、農業には就かないのは当たり前の状態だったんですけど、選択肢の中に農業があって、例えば農業法人に就職した時に「あそこなら安心だね」って地域から思われるような地域にならなければいけないなと思っていて、それだと、やはり１社だけではなくて、地域全体の農業のレベルや価値が上がっていくことが凄く大事かなと思って活動しています。

もう１つくりはらファーマーズラボとして大事にしているのは、農業法人で、農業で、飲食業で、加工業でというその「なんとか業」に縛られた仕事の仕方をしたくないなというのもあります。農業の常識と飲食業の常識が違っていて、私も沢山トラブルに合ってきました。栗原のような田舎の地域で「うちの業界の常識だとこうだからね」みたいな形で仕事をしたくなかったので、くりはらファーマーズラボの定款に書いていますが、「何でもやります。農と食に関わる仕事であれば何でもやります」という会社にしようと思って作りました。加工品も開発しますし、飲食店とのイベントもやります。そういったことをやりながら地域の農業が良くなるというのを目標としてやっています。

具体的に何をやっているのかという話なんですが、これは数少ない成功例です。私が野菜を集めて飲食店にまとめて卸すのをやっていまして、その中で取引がある農家さんが「大根が１，０００本余る」って言われました。それは、２０２１年の３月にコロナで給食がストップした時に、「１ヶ月分の大根がまるっきり余る」って言われて、某大手スーパーのプライベートブランドをやっているので、名掛丁のアーケードにあるスーパーの店頭で安売りできるという話がありました。ただ、給食に納める野菜は面倒で、グラムがどうのこうのとか、本当にセンシティブです。でも農家の人たちは、子ども達に食べさせたいから作っているんです。そういうふうに作った野菜を「安売りか…」と思って、その当時、ちょっと仕事も減っていたので、会場の丸勝さんのシェフと栗原と縁があるデザイナーと話をして作った商品です。大根おろしでゆるキャラを作って、コンテストとかしながら売りましょうという鍋セットを作りました。１ヶ月で３３０ぐらい売りました。残りの７００本はスーパーで安売りしたんですが、そういうふうにきちんとしたバックグラウンドがある商品は、ちゃんとマーケットで評価されるなというのを学びました。あとは、第２弾でバーベキューセットを作って、大正大学の学生と一緒にクラウドファンディングをやったりもしました。

あとは継続的にやっているのは、飲食店でフェアをやっています。栗原の野菜を使ったり肉を使ったりしたメニューを提供してくださいということで、現在もやっていまして、皆さんのところにチラシも置かせていただきました。仙台と栗原のお店、今回５６店舗で「栗原秋の大収穫祭」というイベントをやっていて、そのイベント期間中は栗原の野菜をそのお店で扱われるということをやらせてもらっています。例えばここの丸勝さんで１１月２２日に生産者が沢山集まってきてランチビュッフェをやるとか、生産者と飲食店が交流しながらお互いのレベルを上げていくみたいなことをやっています。

あと最近では、「くりはら未来レシピ開発合宿」というのをやっています。地域に学生を呼んできて、飯を食わせて、案内して、ワークショップをして、学生から意見をもらって帰すというのは、たくさん行われていると思います。そうすると大体は、「学生さん考えるもの面白いっちゃね」って地域の方が言って終わってしまうんです。せっかく学生が考えたアイディアを活かせてないんです。それで、今私がやっているのは、企業とか地域が責任を持って学生と取り組むということをやりたいと思って、去年キユーピー株式会社東北支店とパプリカを使ったレシピを開発して、キユーピーがそれを商標取ってプロモーションしています。飲食店でメニューにしたり、レシピ提案をスーパーさんにさせてもらったりとか、そういうふうに企業が責任を持ってガッチリ取り組むということをやりたいなと思って、あとは宮城大の酵母の先生の研究室の学生を呼んできて、地域の色んな所から酵母菌を取って培養してパンにしようと思っています。再来週やります。要は学生が色んな所に行って経験するのは良いんですけど、やはり色んな地域に行った中の１つになりたくないので、栗原とも深い縁を作ってもらうということをやっています。これは本当に色んな栗原の方々と学生の縁を繋ぐという意味での取組です。

あとはＢ品、Ｃ品を加工品にして売りましょうという６次化は、あまり好きじゃないので、良い物と良い物をちゃんと組み合わせて価値のあるものにしたり、他では作れない加工品を作るというのをやっています。さっき紹介しかねましたが、耕佑がケールを作っていて、そのケールを使ったケールオイルというオイルソースを藤崎のケヤキカフェのシェフと一緒に作ったり、色んなスキルのある企業同士の合体作を作るというのをやっています。蔵王のシェフと舞茸のごはんのおともを作ったり、あとはケールオイルの第２弾はシイタケの捨てられている軸を使ってラグーソースを作ったりしています。そういうふうにシチュエーションを考えた時に面白くなるような加工品で、あとは棚ですね。野菜の棚って獲得した時に売り場で、直売所とかで野菜が無くなる時期があるので、その時期にもちゃんと物が置けるように、ケールが無い時期もケールを思い出せるようにという形で色んな商品を今開発しています。

あとはキッチンカーを購入しておむすび屋さんをやっています。おむすびを売ってお金を稼ぎたいわけではないんですが、おむすび屋さんを通して地域の食とか農業を伝えていく、ツールとしてのキッチンカーです。おむすび屋さんやってない時は地域野菜でタコス作ったりもしています。キッチンカーの活躍場所があったら紹介していただきたいなと思います。今度、あすと長町で舞茸ご飯を炊いて売るというのを１２月にやりたいと思います。

あとは「テロワージュ」という秋保ワイナリーの毛利社長が考えた言葉なんですけど、地域の食とお酒を楽しむ会のことをテロワージュと言うんですけど、私たちは生産者にフォーカスしています。生産者を主役にしたイベントを開催しています。２年半でパプリカ、レンコン、ケールとお米の４回やったんですけど、その日限りのコース料理を農場のそばでやったり、ゲストシェフが来て料理するというツアーをやっています。地域の農産物をＰＲする中で、高めの値段で売れる商品がテロワージュという形になっています。この間の日曜日はお米の生産者と蔵王のシェフの組み合わせで、外でご飯を炊いて、ビュッフェ形式で子どもも大人も楽しめるような感じのスタイルでやってみました。こういったことをしながら、地域の農業というものの価値を、地域の外の人だけじゃなく中の人にも伝えるという活動を企業としてやっているのもくりはらファーマーズラボです。

まとめさせていただきますと、農産物の販売流通をメインにやっています。野菜とか肉を集めてきて、肉は直接ですね、野菜を集めてきて飲食店とか販売所に送るということをやっています。あとは加工品の開発・販売。あとは人が交流する仕組み作りというのが一番大事だと思っています。農業や食に関わるという意味で、関係人口という言葉は大分使われていますが、ちょっと深い関係人口を作るというのをやっています。移住者や農業者を増やすということで繋がればなと思っています。あまり地域の線とか企業の線を感じずに、地域の農業を事業として、生業として続いていく、地域が面白くなるということを大事にしています。「それが経済的にちゃんと循環するの？」とか、「その活動サスティナブルなの？」っていうのは凄く考えながらやっています。失敗も沢山しますけど、アレンジしながら継続して地域が良くなるということをみんなで目指しています。くりはらファーマーズラボという会社組織はあまり大きくないですけど、くりはらファーマーズプロジェクトという団体はメンバーが２０人くらいいるので、彼らと一緒に考えながら地域の農業を良くしていければなと思って模索している会社です。

最後におまけです。今ＮＰＯ法人の登録申請していました。障がい者の福祉法人を作ります。私の会社でも障がい者を雇っていますし、１０年以上障がい者と一緒に仕事してきて、福祉業界の方と話をすると、語弊があるかもしれませんが、障がい者の人が仕事しやすい環境をどう作るかという話になりがちです。私は農産物を作っているので、うちのオペレーションに入れる人を雇用していくのが仕事ですが、そこがずれちゃうと思ったので自分でやりたいと思ったのがひとつと、あと、会社を経営していて思うのが、障がい者と健常者そんなに変わらないなと思っています。極端な言い方ですけど。出来ることは出来る、出来ないことは出来ない。苦手なことははっきり苦手と言える時代になってきたなと思っているので、特に耕佑の仕事は細かく分けていけば、「この仕事はこの人」って分けられます。なので、今障がい者法人を作って、障がい者の役割を作るということが目的ですけど、役割分担として外国人と障がい者と健常者と上手くやることで、地域の農業を継続出来ればと思っています。最終的に地域の農業法人に人を送り出す、障がい者の就労支援施設になれば良いなと思っています。

あとは私と加工業の人とシェフの３人で立ち上げるので、最後にカフェまでやれれば、地域の食と農の周りをその障がい者法人でフォローできると思って立ち上げます。耕佑も

耕佑で課題が一杯ありますけども、地域の農業の方が課題は沢山あるので、色んな形でアプローチをしていきたいなと思っている次第です。
　ちょっと長くなりましたけど以上です。ありがとうございました。

伊藤委員長：はい。ありがとうございました。現地での視察と今の説明を含めて、どういった点でも結構です。質問なり御意見をいただければと思います。はい、遠藤委員。

遠藤委員：地域社会デザイン・ラボの遠藤と申します。先程は御案内ありがとうございました。質問が細かく言えば２点あります。こちらの委員会でも毎回人材というところにフォーカスが当たっていて、そういった点で、今後は人材として色んな課題が山積していると、委員の皆さんからも毎回意見が出ます。伊藤さんのような経営人材をもっと増やすにはどうしたら良いとお考えになっているかということと、経営人材じゃなくても農業分野でなくても、さっきシェフの方とかデザイナーさんってお話があったと思うんですけども、そういった異分野の人が更に農業の分野とか地域の農業とか農業者の方と繋がって参画していくための何か秘訣や、何か御経験の中から教えていただけることがあれば是非伺いたいと思いました。御説明の中では農協で働いてらっしゃって、その後耕佑さんに来られたというのもあるので、言葉は悪いんですけど「農協から引き抜く」という手もあるのかなとか思っています。地域経営とか地域運営組織の中で元農協の方が御活躍されているケースって結構あるんです。なので、そういったところにこれからの可能性とか、この辺にチャレンジしていった方が良いんじゃないかといった御助言もいただけたらなと、経営人材に異分野で関わってもらうための工夫みたいなところでお願いします。

伊藤委員長：はい、いかがでしょうか。

伊藤代表：人材に関しては本当にオンタイムで一番悩んでいるところでもあるんですけど、まず簡単なところから、ＪＡから引き抜くという話に関しては、耕佑は未だにＪＡ新みやぎの栗っこエリアの新人研修が来ます。なので、２０年近く毎年ＪＡの新人がうちの会社で研修をしています。先代たちがその中から何人かにたぶん声を掛けたと思います。
　経営人材に関しては、私自身が今成功しているとはあまり言えないので、人材としてどうなのかというのがあるんですけども、こればっかりは本当に難しいなと思います。２年前までは専務をやっていて、「まぁいけるかな」と思っていたんですが、代表になってこんなに世界は変わるんだと、色んな社長に言われてきましたが、こんなに違うんだなということを身につまされながらまだやっているので、優秀な人材というか経営者になれる人材というのは、皆がなれるものでもないと思うので、やっぱり色んなところで色んな人と腹を割って話すことが大事かなと思います。何処で誰が引っ掛かるか分からないですけど、そういうのは大事かなと思っています。
　異分野の方が農業に関わるという文脈でも同じだと思っていて、私が耕佑に入って一番評価されたのは飲み会を断らなかったことだと思います。必ず参加させてもらっていたの

で、その中で意見交換していくと、農業に関わりたいと思っている方は世の中に本当に多いです。ただ、この委員会で言っていいかわかりませんが、地元が面倒で関わり切れない方もたくさんいるんです。なので、そういった方々と一緒に考えると私たちも思いつかないような考えが異分野の方から出るので、今でも異業種の方と話をするというのは本当に大事だなと思っています。結果、私もＮＰＯに関しては異業種の方と事業を一緒にやるという選択肢になりました。

私が耕佑に入った時に、田んぼ農家がどんどん淘汰されるだろうと思っていました。うちの会社の周りみたいな条件が悪い田んぼは誰もやらなくなって、条件が良い田んぼを大きな経営体がやる時代になると思っていました。まだ園芸はそこまでいかないと思っていましたが、急激に技術が発展して、数１０億円掛ければうちの会社の反収の３倍以上は獲れる田んぼの生産法人がもうできています。そうすると、売り上げが１億２億ぐらいの中途半端な施設園芸が淘汰される時代が来ると思っていて、もの凄く危機感があります。なので、私たちの経営規模では次へチャレンジできないので、異業種を含めて違う経営体と一緒にチャレンジすることがもの凄く大事かなと思っています。実際、某大手スーパーのサンチュも登米市と花巻市の農業法人を含めて、お互いフォローしながら「１社じゃなく３社でやろうぜ」と進めています。そういうことも含めて他社と組むというのは大事かなと思っています。

遠藤委員：ありがとうございます。

伊藤委員長：よろしいですか。今の質問に関連してでもかまいません。

江畑副委員長：関連して質問します。舞茸のお話で３社から経営継承する形になりましたが、登米市佐沼の生産者と岩手県の川崎町の方で同時期に辞める人がいたという話ですけど、そもそもそういう方とどこで接点が出てくるのか、どうやってその情報が入手できたのか非常に関心がありました。

伊藤代表：舞茸に関しては、志波姫の舞茸農家さんにネットワークがありました。ちょっとしたブームで２０年ぐらいに始まったところが、年間売上が２，０００万円くらいで、次の世代に継げないので辞めることになりました。あとうちが事業継承のタイミングを大分引っ張って、「ちょっと待って」と言った時期が長かったので３社の跡を継げたと思っています。

江畑副委員長：分かりました。ありがとうございます。

伊藤委員長：補足ですが耕佑は、伊藤秀太代表の前の社長が黒澤さんで、その前の社長の山村さんは確か宮城県の指導農業士会の会長をやられていて、その当時から色々なネットワークがあったと思います。黒澤社長は中小企業家同友会にも参加されていて、そちらで食

産業部会の会長もやられていたので、たくさんのネットワークを持っていたと思います。そのすべてを伊藤秀太代表が引き継いでいるかについてはまた別の話ですが、そういう状況の下で伊藤秀太代表は農協から引き抜かれ、こちらの事業を展開する中で期待されてきたと思います。

また、前の代表のところで話題に出た南沢営農組合ですが、黒澤前代表と山村前々代表らには米作りと施設園芸を両輪に地域を動かさなきゃいけないという思いがあり、非常に狭隘なほ場でも米作りを続ける取組をしてきました。そういう中で、他の地域や栗原の農業の将来を考えて、こういう取組を展開してきたという流れと思います。

ここで私が確認したかったのは、くりはらファーマーズラボは合同会社ですよね。

伊藤代表：はい。

伊藤委員長：一方で、最後のバルーンはＮＰＯ法人で、それぞれミッションというか役割が違いますが、組織マネジメントの観点からみたときに、くりはらファーマーズラボは赤字を出さないでやっていますか。

伊藤代表：はい。

伊藤委員長：ＮＰＯは別に利益を出さなくても良いけど、合同会社は社員に報酬を出しながら素晴らしい取組を持続させる必要があります。そのために、組織のマネジメントをどう考えているのか教えてください。

伊藤代表：くりはらファーマーズラボは、キッチンカーを始めるタイミングで１人プロパーの社員が入ってマネジメントする形にしましたが、現在はキッチンカーに関しては業務委託にしています。今は常勤の社員はいない状態です。何社かの農業法人の人達が能力を集結して回している状況で、この会社を黒字化するのは大変だなという思いがあります。まぁ、３年あれば何とかなると思っていて、トントンぐらいで今やっています。

ＮＰＯはもちろん非営利法人なのであまり考えずに今やっています。福祉としてのまた別な役割があるので。耕佑も含めて機能はある程度集約できるかなと現地ではやっています。あと、マネジメントも外注を割と入れるようにしているので、他所の会社の人たちが月５万とか、１０万で関わってオペレーション回すみたいなことをイメージしてやっています。１社で１人抱えるリスクがちょっと大きい、賃金が結構大きいので丸抱えはラボもバルーンもしばらくしなくて良いかなと思っています。ＮＰＯは専門家が必要です。なかなか難しいです。

伊藤委員長：はい。ありがとうございました。これに何かを付け加えると、経済的な循環やサスティナブルがより強固になるという考えや希望が、伊藤代表なりにあれば教えてください。

３　意見交換（栗原市：合同会社くりはらファーマーズラボ）

伊藤代表：来年には言っていることが変わるかもしれませが、くりはらファーマーズラボに関しては、特にコロナ禍で色んな試すチャンスがあったので試させてもらった中で、加工品の開発と販売、通販を含めてというのが利益を出すポイントになると思っています。ケールオイルも自社加工にしていきますし、加工品に関しても障がい者が携われるので、そういったことも含めて最終的に黒字にできればなと思っています。利益は加工品で取って、仕組み作りの方をきちんとやってくるのがミッションかなと思っています。学生さんの手伝いが沢山欲しいので先生に期待しています。

伊藤委員長：学生とかだけでなく、「金のなる木」のような安定した収入が得られる部門を付け加えていくといいと思います。ファーマーズラボもバルーンも色んな異業種の人たちが直接ないし間接的に色んなことを提案した実行しているじゃないですか。とても面白くていいことですが、経済的な面で不安定だとそこが切れてしまう。そこを担保できる部門とか取組を新たに追加するといいかなと思います。

他にいかがでしょうか。

山﨑委員：河北新報社論説委員の山﨑と申します。これまで伊藤代表が事業を進める中で、例えば国、市、県とか様々な補助金がありますが、「これは非常に使い勝手が良かった。本当に役に立った」というものがあれば教えてください。これから県に期待するとすれば、どのような補助金、または行政の支援が欲しいのでしょうか。先程の草刈りや鳥獣被害の話も含めて周辺環境整備が必要だと思いますが、いかがでしょうか。

もう１点は人材不足についてです。運転手の不足が非常に深刻なようで、バスの減便やタクシーも減り、ライドシェアが浮上しています。人手不足は交通の分野にとどまらず、農業も含め、恒常的かつ構造的な問題ではないでしょうか。今、ネパール人の雇用の話を伺いました。外国人材への期待、そこに突破口を開かないと恐らくもう日本は立ち行かなくなるのは明らかだと思います。耕佑さんでは上手くやっていると思いますが、外国人材登用への期待感や規模感、これから先どう活動していくかを含め、将来的なイメージがあれば教えてください。

伊藤代表：はい。では答えやすいところから、人材面のイメージですけど、外国人は特定技能で正社員を２人雇っていますが、もう１人今から雇いますけど、正直、正社員の給料の２割ぐらいが間に入る支援機関に取られるので、結構お金が掛かります。正直、「外国人育ててまで雇うと考えたら日本人の社員を雇った方が良いよね」と思っていて、雇う気は全く無かったんです。たまたま縁があって入れることになったんですが、入れてみて分かったのが、ネパール人の方がよく働きます。やっぱり持っている危機感とかが全然違うのかなと思っています。比較すると失礼な話になるのかもしれませんけど、私の先代の社長たち、今の７０代の人たちを見て「とんでもねぇな」と思っていたんですよ。一緒に草刈りをしても、我々４０代、３０代がまいっていても、彼らはずっと働いているので凄いなと思ったんです。それに近いと思っていて、やっぱりハングリーさが全然違います。平和

に育った今の日本の２０代、３０代、４０代とは違うなと思います。だからネパールの方達は危機感があって来ているので働きが違っていて、私九州の農業法人さんとかをいくつか見させてもらった時に、甚だしいところは社長と専務以外全員が外国人なんです。「こんなことしても」と思ったんですけど、今は気持ちが分かります。そうしなければ会社はダメになるんだろうなと本当に思ってしまうぐらい。だから外国人人材も農業分野でも外せなくなってくるなと思っています。結構県内でも入れている方が多いと思います。

それと障がい者に関しては、さっきも言ったように障がい者と健常者はそんなに違わずに働いてもらえるという印象があって、注意しなきゃいけないところもありますが、障がい者に対しての展望としては、将来的にグループホーム型をやろうと思っています。グループホームを展開している方と知り合って色々アドバイスもらっていて、直ぐには出来ないんですけど。うちで働いている障がい者の子たちは親が送迎していて、結局７０歳前後の親が今送迎しないと通えないんです。「親が死んだらどうするの」ってなりますよね。その時に彼らはうちで働くのを諦めて何処かに行かなきゃならないので、「じゃあうちでグループホームやっちゃえば良いのかな」って思っていて、グループホームかつ仕事がちゃんと与えられるという環境はまだレアケースなので、それを確立出来れば、変な言い方ですが、働く意欲のある障がい者が全国から集まってきます。「あそこなら働き場所があるよね」「住む場所もあるよね」というような。だからそういう所を目指せればいいかと思っています、本当に人材いないです。なので、そこをケアする意味でもグループホーム型は必須だと思っています。

お金の話は、農業系では新規事業の立ち上げに対する補助金はありますが、当たり前の話ですが、施設の更新とかには出にくいんです。その間に設備投資できるぐらいの内部留保しなさいという当然の流れなので当たり前だと思うんですけど、さっき触れましたけど、今、設備投資が必要なものが増えています。今の古き良き農場では稼げる金額が頭打ちです。人件費もかかります。人に替わって機械を入れようとするとお金が掛かってしまって、老朽化もしますし、そういうところが営農を継続するための補助があれば、２億３億ぐらいの中途半端な農業法人でも生き残れると思います。家族経営で２，０００万、３，０００万ぐらいの売り上げがあれば家族で飯は食っていけますが、そこからレベルアップしようとして、１億円を目指してダメになっていく農業法人が多いと思っています。１億円を目指しても利益は出ないです。利益が薄いまま、売り上げと経費が同時に伸びていくだけなので、そこをどうやってケアするか、どの規模感で経営するのがベストかを見極められる人材の育成が大事かなと思っています。「金額でくくって設備投資しろよ」っていう話じゃなくて、今経営しているところが継続するための補助金があった方が良いなと思います。

あまり喋ると変なことになりますが、人材育成系がめちゃくちゃ多いですよね。私も出たことありますし、農業塾みたいなのものが沢山あるんですけど、人材育成は難しいなと思っています。人と交流する仕組み作りの補助をいただいて合宿をやっているんですけど難しいなと思います。そういう時に一番必要だなと思うのは、最初の段階でプロセスじゃなくて結果をきちんと共有したいと思っています。行政と委託や補助を貰っている人間と

３　意見交換（栗原市：合同会社くりはらファーマーズラボ）

「ここを目指すんだよね」っていう話が握れてないと、途中で齟齬が生まれるなというのがある。色々な人材育成も関係人口づくりも全てにおいて、前段のところで話ができると良いなと思います。でも、どうしてもプロポの企画で決まるので難しいと思うんですけど、取った後に苦労している方もいるので、そこがクリアになると良いなと思っています。あと最近はありますけど、複数年契約ですね。単年度で結果出すのは本当に大変というか私は無理だと思っているので、複数年で事業を委嘱できるようなスキームづくりは、これから特に必須かなと思っています。

山﨑委員：県の予算も国の予算も単年度ですから、その弊害ですよね。

伊藤代表：２月２８日までに締めるのは大変なんです。

山﨑委員：今おっしゃった、個人の方々が農業法人化して、１億円ぐらいで壁にぶつかるというのは、例えば新聞の見出し風に言えば「１億の壁」のようなものでしょうか。

伊藤代表：５，０００万円でも１億円でも２億円でも、全部壁がいっぱいあります。

山﨑委員：淘汰されるとすれば、１億円ぐらいでしょうか。

伊藤代表：１億円ぐらいが多いなって個人的には思います。人を雇わなきゃいけない話ですよね。そのときに固定費が掛かって、何かエラーが起きたときに一気にバタっといっちゃうというのが１億円ぐらいで、起きているんじゃないかなと思っています。

山﨑委員：農村の持続可能性という今回の補助金や制度の趣旨からすれば、継続的にサポートすることが必要だと、とても思いました。ありがとうございました。

伊藤代表：是非お願いします。

伊藤委員長：はい。他いかがでしょうか。千葉専門委員お願いします。

千葉専門委員：千葉でございます。くりはらファーマーズラボさん、色々農産物のセット販売ですとか、加工品、それからシェフとのコラボなどに取り組まれておりまして、それをこの地域の人が交流する仕組み作りというんですかね、交流人口・関係人口の創出に繋げようというところでございますが、こういう企画の場合ですね、特に消費者の心を掴んで地域に取り込もうとする場合ですね、当然素材の素晴らしさというのはそのとおりだと思うんですけども、それに加えて地域性ですとか、あるいはストーリー性というのが非常に大事ではないかなと常々思っているのですが、くりはらファーマーズラボさんで、こういった取組をする上で、栗原という地域をどのように入れていくのかという工夫ですとか、

苦労ですとか、そういったものを教えていただければと思います。

伊藤代表：そうですね、おっしゃったとおりで日本の田舎に行けば、景色は何処も綺麗だし、空気美味しいし、食うものは美味しいんですよ。なので、この地域を何で選んでもらえるかというと、やっぱり人が素晴らしかった、もしくは特別な体験ができたぐらいかなと思っていて、なかなか栗原を選んでもらうのは未だに難しいと思っているんですけど、栗原の何で農業が盛んになったかという歴史の話は、地域のおじさん達の何人かが、そういうのが大好きな人たちが沢山喋ってくれたんです。そこで教えてもらったことを私は喋っています。人が聞いたことを自分なりに言葉にして喋ることで地域の歴史とか面白さを伝えていくというのと、あとはうちの仲間では喋れる生産者が沢山いるので、その人にフォーカスしただけでもファンは付くし、あとは様々な場面で、今日の人たちは何を求めて来ているかをちゃんと分かっているのが大事かなと思っています。日曜日に親子で来てもらうようなイベントをやる時は子どもが楽しんで「もう１回来たい」っていう仕掛けが欲しいと思いましたし、逆にちょっとお金出して、ゆっくり座ってランチとお酒を楽しみたいという方々は、レクチャーというか、ウンチク多めのストーリーの方が大事だったりします。そういうのは、やっぱり経験で、何回か失敗もしていますし、あとは私自身他所の地域でイベントがあったらできるだけ参加して学ぶようにしています。なので、栗原だと田んぼが沢山あって、江戸時代に治水して江戸に運ぶお米の３分の１は栗原産だったとかそういうストーリーとか、餅文化がすごくあってという話を織り交ぜたりしながら、ターゲットに向けて届くようにしています。

千葉専門委員：ありがとうございます。

伊藤委員長：あと１０分ぐらいです。いかがでしょうか。後藤専門委員いかがでしょうか。

後藤専門委員：はい。全体のお話で、農業法人を先代が築かれて、そこからくりはらファーマーズラボやＮＰＯ法人という形になったという話を伺って、私もずっと課題にしているんですが、農村ＲＭＯという形の一端かなと思っていました。そこを実に体現されているという思いはしたのですが、一つだけ規模感がちょっと分からなかった。法人はあの周辺だろうなと思いましたし、ファーマーズラボがどのぐらいの範囲で結成されているのか。あと、法人協会みたいなものがあると先程話をされましたので、どのぐらいの規模感というか地域感で、どのぐらいのことで営まれているのかなと思いました。

　それからバルーンについても、福祉の事業は地域内組織の中で非常に大きな要素になっていると思っているんですが、それについてコメントいただきたいと思いました。

伊藤代表：規模感で言うと、耕佑に関しては地域営農を維持するのが目的で、今は大体３０人ぐらい人がいて、２億円ぐらいの売り上げがあるというのが耕佑です。くりはらファーマーズラボは栗原全体、栗原以外の人も動員はしていますが、農産物とか加工品を扱って

いて、大体１，０００万円台ぐらいの年間の売り上げになるかなというところです。バルーンに関しては、まだスタートしていませんが、イメージ的には２０人ぐらいの障がい者が就労してほしいというイメージで立ち上げます。なので、難しいのが、農協ができることと我々ができることの住み分けが上手く出来ていれば良いんですけど、そこがやっぱり上手くいっていないのもあって、例えば農協が仙台牛を売り込んだ組織から「野菜も欲しい」と言われた時に「野菜は無理」となって、うちに話がきました。「そのぐらい農協ができるんじゃないの？」って思いながら、うちは関係性があるので色んな話できますが、その辺もっと流通の経路はうちと農協が持っているものが別々なので、ミックスできたら東京に運ぶことも可能になるんですけど、農協は古き良き組織ですので、なかなか変えるのが難しいなというものがあって、その辺を本当はもっと協業できたら面白いなというのがあります。難しいですけどね。

伊藤委員長：他いかがですか。

伊藤委員：先程現場を見せていただいたときに、自分でメンテナンスをするという話があったんですけど、私の地域にも「美里グリーンベース」があって、地震で施設が一部壊れて、それがオランダの製品だったので、コロナで入らなかった。それで生産目標に大分苦労したみたいだったんですけど、そういう施設を自分でやって、いずれは自動化を目指しているんでしょうけど、ある程度自分でメンテナンスもできるのは凄いなと思いました。
　それと、やっぱり人が交流する仕組みづくりというか、それらがやっぱり地域の活性化に繋がっているというのを非常に感じました。

伊藤代表：自分でメンテナンスする規模なら、もうちょっと全体が小さくて良いかなと思っています。美里グリーンベースさんも「フル稼働したら見に行かせてください」って言っているんですけど、あそこがフル稼働すると脅威です。私たちももしかしたら数年後傘下に入っているかもしれない。

伊藤委員：そうですね、生産量が１日４万株ですもんね。

伊藤委員長：他は、平田委員いかがですか。

平田委員：感想の話になりますけど、ファーマーズラボの活動については、栗原ブランドを作り上げていくということで、色んな分野の方々がコラボして、色んな部分でどんどん共有していくということかなと思いました。農業者の方が自分で機械を買って加工品をやるっていってもリスクが大きいですし、色んな分野の方がそれぞれの持ち場で協力をし合うことによって新しいことを気軽にトライできるという、そういう気軽なことで、１人でやるよりも色んな分野の方々と集中して凄く良いのかなと思いました。地域振興の役割も十分果たしてらっしゃると思いますし、そういう形でそれぞれの営農の方々が新しいことに

チャレンジしていくときに、別の分野のプロの知恵とかを使わせてもらえるというメリットがあるのかなと思いました。

あとは耕佑も含めて農業生産の現場で障がい者の方々を雇用していこうという話は、数年ぐらいは農福連携ということは言われていますけど、特に耕佑さんところでは施設園芸と水耕栽培で、かなり作業が細分化されたような形ですと、全国的にも既に成功していらっしゃるような事例もあるようですし、是非耕佑さんの取組が上手くいけば良いなと思いながらお聞きしていました。ありがとうございます。

伊藤委員長：それでは１２時終了が目標でしたので、ここでひと区切りつけたいと思います。今、平田委員がまとめてくれたので私が敢えてまとめる必要はないかと思うのですが、関連してお話しすると、先日産業教育審議会に出席したら、宮城県に限らないのかもしれませんが、県内の農業高校や産業高校の有効求人倍率は１を超えていて、現在は４倍になっているようです。実にたくさんのニーズはあるようですが、本当にそこに就職して定着しているのか、首都圏に行って５年後どうなっているか追跡してみると、意外と離職していることが多いという結果で、なかなか人材確保は難しいということでした。同時に、数年前の人口予測から状況は変わってきていて、１０年先ぐらいには、１０代前半の世代がもの凄く急速にこれまで以上の勢いで減少していくであろうということが、現在の検討課題になっています。そういう中で、どうしても地域を維持する、産業を維持するとなると、外国人の人材を雇用するのは当たり前のことと思います。ただ、送り出す側の人に話を聞くと、その人はカンボジアで会社を作ってカンボジアの人たちを日本に送り出している日本人ですが、自分が日本人だから日本に送っているわけではなくて、日本の条件がたまたま良いから送っているだけということでした。「日本より条件が良いところがあればカンボジアの人たちを違うところに送るのが自分のミッションです」という話で、そのとおりだと思います。逆にいうと、彼らを必要とする日本国内に、海外からみて魅力的な条件、例えば、賃金水準や暮らしや生活の安全が整っているのかということです。さらに、実習生は母国に帰って同じ仕事をするケースはほとんどありません。彼らがどんな将来を描いているのか、その実現にどれだけ貢献できるか、そういったことまで考えて対処していかないと外国人人材は定着しないと思います。北海道の酪農家を数１０年見ていると、牧場で働いている実習生の母国は次々と変わっています。賃金水準以外のプラスアルファとして何を設定したら良いのか。研修施設もどのように整備していくのがいいのかを検証する必要があると思います。

また、健常者と障がい者の話で、デイサービス会社の運営もしようという話があったと思います。それは良い発想だと思います。ただ、平田委員の話にもあったように、全国の成功事例の一つに、静岡県浜松の「京丸園」があります。京丸園は水耕栽培で様々なミニ野菜を生産販売している農業法人です。今日の現地視察でも水耕栽培のトレイを洗っていましたが、京丸園では片手を失った人がその作業をやっています。片手でも我々と同じぐらいの効率で作業ができる仕掛けを作っています。そういった取組も必要でしょうし、あと京丸園では障がい者を受け入れるために、福祉関係の資格を社員が取得しています。送

り出す側と受け入れる側がきっちり連携して、障がい者１人１人の条件や状況を把握しながら作業できる関係性づくりを上手くやっていると思います。最近は、業務全般をタスク毎に細かく整理して、障がい者や高齢者ができる作業を仕分けして管理する取組も始まっています。たぶん耕佑もそうなっていくのではないかと思いました。

それから人材育成ですが、先ほど伊藤秀太代表も話したように、おじいちゃんが農業をやっていてもお父さんに「農業をやらなくていいよ」と言われた。その結果、地元に有能な人材が暮らなくなっていると。そういうことを考えれば、小さい頃からの教育、家庭内教育も含めてもう１度時間を掛けて見直すことをしていかなければ、結果的には都市部にばかり人が集まることになりかねないと思います。この問題をどう考えていくのか、農村振興において大切な課題になる気がしました。

最後は、地域運営組織として、くりはらファーマーズラボやバルーンに大きな期待を寄せています。農村ＲＭＯの優良事例として島根県松江市の活動がよく取り上げられています。そこでは運営するメンバーも多様化していて、地元の様々な業界で経験を積んだ人たちがたくさん関わっていて、だからこそマンパワーが充実しているし、取組が多様化しても対応できています。地元のニーズを吸い上げながらやることを踏まえると、くりはらファーマーズラボが農村振興施策検討委員会の役割でもある多面的機能支払や中山間地域等直接支払も扱えるようになると、「金のなる木」の部門ができてよいのではないか、そういったことをイメージして先ほど発現させていただきました。地元の食材を加工して販売するという農業法人の一つの姿ですが、地域運営組織として利益はあまり生み出さないけど毎年しっかりと活動資金が調達できる部門を作ることで、多様な人材をたくさん抱えることもでき、事業の展開の仕方も変わってくるのではないかと思いました。

今日みなさんから出していただいた意見や感想を伊藤秀太代表はしっかりと心に留めてくれると思いますので、それをもとに栗原だけでなく宮城県全体の農村の発展に貢献してくれるように取り組んでいただくことを期待して終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

司会：伊藤委員長、ありがとうございました。本日の意見交換の内容を踏まえまして、本県の農村振興に役立てていきたいと思います。

なお、本日の意見交換会の議事録ですけれども、伊藤委員長からもお話しいただきましたが、後日公開の前に事務局作成のものをメールあるいはＦＡＸで皆様にお送りいたします。内容の御確認をいただいた上での公開となりますので、お送りしたものは御確認いただきたいと思います。

以上をもちまして、合同会社くりはらファーマーズラボ様との意見交換会を閉会いたします。皆様、お疲れ様でございました。

４　意見交換（栗原市：峯地区環境を守る会、若柳蓬田集落協定）

「令和５年度　第２回宮城県農村振興施策検討委員会」
（多面的機能支払交付金、中山間地域等直接支払交付金：峯地区環境を守る会、若柳蓬田集落協定）
日時：令和５年１１月１０日（金）　午後１時４０分から午後３時１０分まで
場所：栗原市若柳多目的研修センター

司会：それでは定刻になりましたので、これより令和５年度第２回宮城県農村振興施策検討委員会の意見交換会を開催いたします。
　最初に、本日現地の活動組織から出席いただいております若柳蓬田集落協定、峯地区環境を守る会、栗原市役所の皆様を御紹介いたします。
　まず若柳蓬田集落協定　代表　佐藤忠一様です。

佐藤代表：若柳蓬田集落協定　代表の佐藤と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

司会：会計　鈴木茂様でございます。

鈴木会計：鈴木茂と申します。本日はよろしくお願いいたします。

司会：続きまして、峯地区環境を守る会　会長　丸山正精様でございます。

丸山会長：峯地区環境を守る会　会長の丸山正精でございます。本日はよろしくお願いいたします。

司会：副会長　千葉誠悦様でございます。

千葉副会長：千葉です。よろしくお願いいたします。

司会：同じく副会長　瀬戸和重様でございます。

瀬戸副会長：瀬戸です。よろしくお願いいたします。

司会：会計　千葉政宣様でございます。

千葉会計：よろしくお願いいたします。

司会：監事　千葉清太郎様でございます。

千葉監事：千葉でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

４　意見交換（栗原市：峯地区環境を守る会、若柳蓬田集落協定）

司会：書記　高橋啓様でございます。

高橋書記：高橋です。よろしくお願いいたします。

司会：書記補佐　菅原公喜様でございます。

菅原書記補佐：菅原でございます。よろしくお願いいたします。

司会：続きまして、栗原市農林振興部農業政策課　主幹兼農業政策推進係長　片倉茂様でございます。

片倉係長：片倉です。よろしくお願いいたします。

司会：主事　佐々木辰太朗様でございます。

佐々木主事：佐々木と申します。よろしくお願いいたします。

司会：なお、本検討委員会委員並びに専門委員の皆様、本県職員及び宮城県多面的機能支払推進協議会事務局員の紹介につきましては、お手元の出席者名簿に代えさせていただきますので御了承ください。皆様、本日はよろしくお願い申し上げます。

議題に入る前に、定足数でございますが、午前中に引き続きまして本日の会議が有効に成立しておりますことを御報告いたします。

また、本委員会は、県の情報公開条例に基づき公開で行うこととしております。本日の議事録は後日公表をいたしますので予め御承知おき願います。

なお、議事録作成のため、本日の会議はICレコーダーにより録音をさせていただきますので、御発言をいただく際には、まず所属と名前をおっしゃっていただき、事務局が持ち回りますマイクにて御発言いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、次第に従いまして、意見交換を進めてまいります。開会にあたり、伊藤委員長から御挨拶をいただきたいと思います。伊藤委員長、お願いいたします。

伊藤委員長：委員長の伊藤でございます。皆様にはお忙しいところ令和５年度第２回宮城県農村振興施策検討委員会に御出席賜りありがとうございます。

本委員会ですが、宮城県の農村振興を図るため、多面的機能支払交付金事業、中山間地域等直接支払交付金事業及びみやぎの地域資源保全活用支援事業の三つの施策について調査・審議することとしており、本年度は第２回目となる本日の検討委員会では、各施策に取り組まれている活動組織の現地調査と、現地の皆様と意見交換を行うこととしております。

本日ですが、多面的機能支払交付金事業及び中山間地域等直接支払交付金事業の検討の

場としまして、栗原市の活動組織の皆様と意見を交換させていただければ幸いです。この意見交換を通しまして、地域の皆様の活動の内容や課題等をお伺いして、それらの課題解決の方策等を皆様と共に考えてまいりたいと思っております。

本日御出席いただいております委員・専門委員の皆様から忌憚のない御意見、御助言をいただくことによって、本日の検討委員会が宮城県の農村振興の益々の発展に寄与するものと祈念いたしまして、簡単ではありますが私の挨拶とさせていただきます。限られた時間ですがどうぞよろしくお願いいたします。

司会：ありがとうございました。それでは、これより、意見交換に入ってまいります。農村振興施策検討委員会条例第５条第１項で、委員長が議長となるよう定められておりますので、ここからの進行は伊藤委員長にお願いしたいと思います。

伊藤委員長、どうぞよろしくお願いいたします。

伊藤委員長：はい。それでは、これより議長を務めさせていただきますので、皆さんどうぞ御協力よろしくお願いいたします。

早速ですが、本日は、中山間地域等直接支払交付金事業に取り組まれている若柳蓬田集落協定と、多面的機能支払交付金事業に取り組まれている峯地区環境を守る会、そして、栗原市役所の皆様に御参加いただいております。この場では最初に、各活動組織の代表より活動内容の御説明をいただきます。また、取組の成果として感じていることや、集落の課題、交付金制度や行政に対して要望したいことなどがありましたら、併せてお話しいただき、各活動組織の皆様から御説明をいただいた後で、委員・専門委員との間で意見交換をしていきたいと思います。

それでは、最初に若柳蓬田集落協定様より御説明の方お願いいたします。よろしくお願いいたします。

佐藤代表：若柳蓬田集落協定の佐藤と申します。それでは、概要について御説明いたします。私たち中山間地域等直接支払交付金制度の第２期対策に平成１７年度から取り組み、協定参加者３２人、協定面積１８．８ｈａで活動しております。最初に始めた年は、もう少し人数もいたし、面積も実はもう少し多かったんです。ところが、第２期対策が始まる前に協定農用地の一番東側の面積が譲渡されて、他の地目になったために、今の１８．８ｈａということで活動をしております。

取組のポイントにも書いておりますが、市の担当者、そして県の農山漁村なりわい課の職員の皆さんの勧めもあり、令和２年度から４年度まで県の支援事業に取り組み、ワークショップを開催し、地域課題や地域資源の活用方法などについて話し合い、その一環として尚絅学院大学と連携して、農作業体験や収穫祭などの交流事業に取り組んでおります。尚絅大学と連携するようになってからは、減反している田んぼをお借りして、サツマイモ・エダマメそしてソバを植え付けしておりまして、来週の１８日はその収穫したものを皆さんにおふるまいをいたしまして、組合員の皆様、そして、尚絅学院大学の皆さんにもお出

でいただきまして、収穫祭で親睦を深めているところでございます。

また、今年２月には農林水産省の地域振興課長が視察に見えられ、「素晴らしい棚田なので、是非指定棚田地域の申請をしてほしい」と勧められ、協定組合員の中で話をし、「指定を受けて活動をしていく」との結論に至り、市と県の皆様と相談し、現在申請中と伺っております。

私たちの棚田の良さを広げる活動として、蓬田棚田フォトコンテストを実施しておりまして、今年で４回目を数えております。皆さんのお手元にあると思いますけれども、「棚田カード」の作成もその一環として県の皆さんに御協力をいただきまして作成してございます。これは、県外の随分遠くの方からも「欲しい」という依頼がありまして、最初に作ったものは全部無くなって、追加でまたカードを作ったという経緯がございます。

取組の効果としては、農用地の保全及び棚田の景観保持のほか、交流事業やフォトコンテストの実施により、構成員の棚田保全のモチベーション向上に繋がっております。

今後の課題といたしましては、何処の地域にも当てはまるものと思われますが、先祖伝来の農地を次の世代に継承できるよう棚田の保全に努めてきましたが、農業従事者の高齢化などにより、従来の活動を継続していくには担い手の確保が喫緊の課題となっております。私たちの協定の中でも現在作業に出て来られる平均年齢を数えますと、大体７５歳を過ぎているんじゃないかと思っております。最高齢では９０歳をちょっと過ぎた方も来て、今、共同作業に協力してもらっております。そういう状況の中で、米価の下落や農業生産資材の高騰などにより、厳しい農業情勢が続いており、課題解決の糸口が見出せない状況となっております。以上でございます。

伊藤委員長：はい。ありがとうございました。続いて峯地区の環境を守る会の皆様から御説明の方お願いいたします。

丸山会長：私たちが活動をしている峯地区は、宮城県栗原市の東部に位置し、栗駒山を水源とする一級河川迫川沿いを水源とした農村地帯です。私たちの組織は、多面的機能支払交付金事業の前身である農地・水環境保全向上対策事業が改正された平成１９年度より活動しており、会員数は、最初は７０名でしたが、今は大体６５名になっています。協力団体として峯自治会、子供会があります。

農地は６，８０７ａ、基盤整備により１ｈａ区画の大規模な円状を中心に整備され、営農条件が整った環境で活動をしています。

取組としては、農地維持活動のほか、自治会や子供会と連携し、生き物調査や花植えを実施しております。峯組員や子供たちの交流も深まる大切な活動となっています。

令和４年度から新事業として、水田の雨水貯水機能の強化、いわゆる「田んぼダム」に取り組んでおります。令和４年度は試験的に約１，３００ａで取り組み、令和５年度は対象農地の半数にあたる３，４００ａで実施しています。私たちの地域にある川は複雑で、栗駒山から３つの河川から一つの川になります。それが大雨のときに増水するので、それが一気に増水して水位が上がらないように、最初は田んぼに全部流さないで止めます。そし

て下流の川の水位が下がったら徐々に３枚ある板を１枚ずつ外して流しています。

今後の課題は、参加者の減少による作業量の増加、担い手の負担増加、農業従事者の高齢化による農業者の減少が懸念されます。今後の管理体制を維持し、峯地区の農地資源の保全・向上を図るためにも、各団体が一体となり、解決策を考えていかなければならないと考えています。以上でございます。

伊藤委員長：はい。ありがとうございました。それでは、ただ今説明いただきましたが、これから委員、専門委員の皆様と意見交換をしていきたいと思います。資料は皆さんのお手元に、若柳蓬田集落協定と峯地区環境を守る会の２地区の説明資料があります。写真なども数多く掲載されていますので、確認したい点や、更には「こんなことやったら良いんじゃないですか」というような御意見などありましたら、発言していただければと思います。

いかがでしょうか。それでは江畑委員からお願いします。

江畑副委員長：みやぎ農業振興公社の江畑でございます。日頃は大変お世話になっております。ありがとうございます。先程の説明で、棚田カードが非常に好評だったということで、県内外というか、どの辺の地域からリクエストがあるものなのか、あるいはどういった方々が希望されているのか、もしお分かりでしたら教えてください。

佐藤代表：群馬県から来たという方もおりますし、もっとずっと南の方からも問い合わせが来ているようです。

片倉係長：栗原市役所の片倉と申します。棚田カードにつきましては当初３００枚印刷していただいたのですが、１ヶ月足らずで無くなってしまいまして、現在追加で作っていただいて配布をしております。市役所にも棚田カードに関する問い合わせがございまして、一番西側ですと香川県から、北では北海道からということで、やはり棚田を回って歩いている方々がいらっしゃっていて、全ての棚田カードを揃えたいということで、一時期、蓬田地区のカードが切れていたので、「ここを揃えれば全国の棚田カード全部揃います」というような、そういった活動をしている方が結構いるようで、今日も実は問い合わせがあって、「遠くて行けないが、機会があれば行きたいので、棚田カードを送ってほしい」といった問い合わせが市役所にも来ているという状況でございます。

江畑副委員長：ありがとうございます。私も毎日通勤で伊豆沼インターを乗り降りしています。１年通じて蓬田集落の協定対象区域を見ていましたが、やはり春先の田植えの時期や、夏の青々と育っている時期、それから秋は黄金色になる時期を、毎日、朝や夏場には夕方にも見ていて、非常に良く手入れされているなぁと感心していました。たぶん私だけじゃなく、あそこを通っていた方はみんな感動しながら通っているかと思うので、是非引き続き手入れをしていただければと思います。

私も若干田んぼがあるので、休みの日に草刈り作業などやりますが、あれだけの面積を

年中通して綺麗に管理しているというのは、非常に労力の掛かることで大変だろうと思うのですが、そう簡単ではないと思いますけれども、引き続き手入れをして景観を保っていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

伊藤委員長：はい。他いかがでしょうか。では佐藤代表。

佐藤代表：はい。せっかくの機会ですので、一つ要望したいことがあります。今、江畑委員が申し上げてくれたように、県北道路から見ると大変綺麗で、昨日から今日には旗を立てて、少しでも目立つようにしております。

　そういうところで、日陰も何もないところですから、１箇所でも日陰になる、例えば東屋のような、皆さんが農作業に来て暑いときには日陰に入れるような、東屋的な建物があっても良いのかなと常々思っております。そうすれば、もっと人も休めるし、交流も深められると思います。現在、写真を募集していますが、そういう方々のためにも休憩場所があっても良いかなと思っておりますので、是非御検討願えればと思います。以上です。

伊藤委員長：はい。ありがとうございます。皆さんから御意見や質問はありますでしょうか。それでは、千葉専門委員お願いします。

千葉専門委員：土地連の千葉でございます。いつも大変お世話になっております。今回取組のポイントに、１３カ所のため池の適正管理に取り組まれておるということで、昨今は大雨洪水被害が大変多く発生している中で、ため池の管理というのは非常に地域的な問題としてあるわけでございまして、その中日本型直接支払制度の活動組織に、ため池の管理をお願いしているという事例があるということで、大変興味深く資料を読ませていただいておりました。ただ、ため池の管理をやっていただくということで、大変感謝の気持ちは一杯なのですが、その一方で、１３カ所のため池を保全管理するというのは大変な御労苦があるんじゃないかと感じておりました。土地連として、宮城県からため池サポートセンターの事務局を受託しているところでございまして、防災重点農業用ため池に限定ですが１００カ所ぐらい定期点検に同行調査をしていて、結構築造年数が古いため池では、例えば水が漏れていたり、酷いところでは取水施設がもう閉塞して使い物にならないといった不具合が結構多く見受けられます。そういった不具合は、なかなか人の手で改修することが難しいケースが多くございます。恐らくこの地域の１３個のため池も、そんなに新しいものではないと思います。色んな不具合を抱えていて、改修の対策など色々と悩みの点があるかと思いますが、それらに対して、例えばこの制度による工事費の手当てですとか、改修に対する課題等がございましたら、お聞かせいただければと思います。

伊藤委員長：はい。いかがでしょうか。佐藤代表お願いします。

佐藤代表：はい。委員から御説明あったとおり、大分古いため池でございますので、そっち

が崩れれば今度はこっちが崩れる、今度は別な方も崩れるという感じで、ため池を使っている人が個人的に自分でできるところを、例えば杭を打って網を張って土が流れないようにするとか、そういう個人個人がそれなりにやっています。

あと、実際に私も一昨年、大雨で漏水して結局土手が流れたんですけれども、それを市の方にお願いして直していただきました。堤の管理というのは大変難しくございまして、とにかく雨が降ったらある程度の水位まで来たら水が流れるように、常にそういう気遣いはしております。もちろん棚田の田んぼも、そういうため池の水を使っているわけです。そうすると田んぼに一杯に畦畔を止めておくと、雨水でどうしても弱いところが崩れるんです。そういうことも含めて常に安全な水位ができるよう畦畔で水口を止めているんです。そういう苦労は皆さん一緒にやっています。ですから大雨が降ると夜中でも水を見に行ったり、田んぼの水口を見に行ったりして、そういう苦労はしております。今年はたまたま逆に雨が降らなくて、ため池の水が無くなって、最初８月の出穂期の頃に大変な思いはしたんです。そういうため池利用というのは良い時もあれば悪い時もあるというような感じで、苦労と言えば苦労でしょうけれども、そういう悩みは常に持っております。ですから雨が降ると本当に心配なんです。以上です。

千葉専門委員：ここにも書いていますが、自然生態系の保全などで多面的な機能を持つというふうに書いてございます。ため池というのは、こういった機能をふんだんに持ち合わせております。やはり地域の宝であり農業の歴史だと思います。ですから、是非地域の皆さんの手で適切な保全管理を続けていただきたいと思っておりますので、今後共どうぞよろしくお願いしたいと思います。

伊藤委員長：はい。関連して資料の５ページにこの蓬田集落のエリアの写真があります。現地に行けば直ぐ分かることですが、千葉専門委員から出たため池ですけれども、蓬田集落のため池は、すべてのため池に柵があって、人が立ち入りできないような状態になっているんですか。

佐藤代表：そうはなっていないです。

伊藤委員長：はい、分かりました。あともう１点、蓬田集落の対象エリアが１８．８町歩で、資料のピンク色の箇所だと思いますが、ここのほ場は全部で何筆ですか。

佐藤代表：１２２筆です。

伊藤委員長：１２２筆ですね。そうすると１筆で１反５畝くらいですね。

佐藤代表：平均すると、一番大きく持っている方が３町８反で、一番小さい方が２畝の面積です。平均すると大体５．５反ぐらいです。一番管理良くて大きいもので２反までは無い

ですね。ですから私の親によく聞かされていたのは、小さい田んぼが何枚もあって、例えば休憩して枚数を勘定したら、「何だ１枚どこさいった、ねぐなったな」って、よく考えてみたら自分の座っているところも１枚で隠れていたというような笑い話もあるんですけれども、そういう田んぼを私の親たちが年月を掛けて、小さい田んぼを１枚というふうに少しでも大きくして今の棚田の情景になったと聞いております。

伊藤委員長：ありがとうございます。２畝から３町８反まで大きさが違う、それから棚田ですから当然高低差が結構ある地区だと思います。その中で条件が整えばほ場整備しようという計画は出ていますか。

佐藤代表：ないです。

伊藤委員長：なしですね。現状のまま保全していこうということですね。

佐藤代表：本当は基盤整備をして、あの辺一体をいくらかでも大きい田んぼになるよう合筆したいと思います。さっきも申し上げたように、高齢化になってきて、若い人たちが集まらなくなっているので若い人たちにやりやすいような農地を継いでもらいたいと私は思いでおりますけども、なかなか基盤整備までという状況にはなっていないと思っております。

伊藤委員長：はい、分かりました。基盤整備をやろうと思っても、簡単にいきそうにないということでした。そういう状況のもとで、狭隘なほ場でもきちんと保全できるようなやり方はないか。近隣の栗原や登米の平坦で１筆２町歩ぐらいのところではスマート農業などできるけれど、こういった条件不利とか高低差のある中山間地域では、農業機械による省力的な生産は難しい。条件が許せば合筆などで少しずつほ場を広くする取組もあるけれど、お話を聞いたかぎり、この１８．８町歩では合筆してもはたしてその効果は出るのか否か、そもそも合筆までする意味があるかという意見も出るでしょうし、そういう中で今後の取組を考えていかなければならないわけです。

それで担い手をどうやって確保したら良いか。その担い手は当然ここで農業やってくれる方が一番良いけれど、そういう人だけではなく色んな関わり方をしてくれる人をまずは増やしていくことを考えているということで、尚絅学院大学やフォトコンテストなどの取組をなされているという理解でよろしいですよね。

委員、専門委員の皆さんいかがでしょうか。確認したい点などありますでしょうか。では山﨑委員お願いします。

山﨑委員：２０年程前、今は無くなってしまった河北新報社若柳支局に４年程勤務していました。非常に懐かしく、感慨深い思いでお話を伺いました。特にこの地域の方々には、農業を維持していくことにプラスアルファの意義があると考えています。やはり伊豆沼・内沼との関わりは凄く深いと思います。皆さん方が農業を続けていてくれるおかげで、野鳥

が飛来してくるわけで、「人の営みとワンセット」だということを改めて思いました。ただ単に自然環境が豊かだから野鳥があれだけいるわけじゃなくて、人為的に農業がきちんと維持されていたから野鳥がいるということを、２０年前に当地に赴任した時から深く思をいたしておりました。皆さん方の農の営みが無くなれば、世界に誇る伊豆沼・内沼の豊かな環境も無くなることに危機感も持っております。恐らく、今日いらしていただいた方々は地域の中でも凄く頑張っているモデルケースの方々だと思います。

代表から担い手の危機感というのを伺って、改めて私自身も危機意識を高めたところです。例えば、最悪のシナリオというか、このまま何も対策をしない場合、モデルケースとされているここでも、何年後に農業が維持できなくなるのでしょうか。蓬田集落は平均７５歳ということですが、峯地区の方もそうですが、結局このまま担い手不足が対策を取られない場合、あと何年持つのでしょうか。

佐藤代表：それはあります。私たち今１８．８ｈａの協定農用地を守っていますが、来年１年は今の５期対策があるので皆さんに頑張っていただくということでお話をしているんですけれども、次の第６期対策に入るときには、「私はもうできないから抜ける」とか、そういう声が聞こえてくるような感じがしています。ですから、もう虫食い状態のような感じになると心配しております。

山﨑委員：タイムリミットというのはあと何年ですか。

佐藤代表：１年ぐらいです。

山﨑委員：早ければ１年ということですね。

佐藤代表：はい。農地が虫食い状態になるのではないかなと危惧しております。

山﨑委員：峯地区の方々はいかがですか。

丸山会長：私たちの地域も同じで、平均年齢が約６８歳から７０歳なんです。それで我々も８０歳過ぎの人が草刈りにくるととても危ないというので、去年から定年制を持ちまして、８０歳で草刈りなど農業の方には出ていただかないようにしていて、ただ、花の植え方とかには出てもらっています。ただ機械を使うものには出ないです。

我々も同じで、段々に田んぼ、農地を手放す人が多くなってきています。息子さんたちがもう勤めていて田舎に戻って来ないと。そうなってくると本当にそういう荒れた状態になります。そういうところまで我々では回していられないので、皆さんと色んな話をしながら花を植えたり、そういうことをやっております。この先心配でございます。

伊藤委員長：よろしいですか。今の話で「あと１年ぐらいで虫食いになるかも」という話が

ありましたが、現在は「来年の今ぐらいまでに地域計画作ってください」と言われていると思います。地域計画課策定の中で、そういうことを話す機会はありますか。市役所の方に聞いた方がよろしいですか。

片倉係長：はい。栗原市役所の片倉です。今お話のありました地域計画は農業経営基盤強化促進法の改正によって、令和７年３月までという期限があるのですが、栗原市では、旧１０町村ありますが、１０月３１日から１１月８日まで、「一番最初から全員にお話しても」ということもありましたので、比較的経営面積の大きい担い手の方々を対象に地域説明会をさせていただいております。その中で、これから具体的な協議・調整と考えているのですが、やはり今お話のありましたとおり、栗原市高齢化率４２％超えておりまして、地域によってはもう５０％を超えているような状況です。もう既に受け手の方、法人化されている方の意見でも、「これ以上もう農地を受けられない」というような経営体も出てきておりますし、逆に「農地をどなたかにお願いしたい」という希望されている、農地の出し手の方が多い状況で、受け手の方でカバーしきれないような状況になっています。それで今、受け手の方々の話の中では、「農地を集約してできるだけ効率化を図っていけば、もう少し自分たちもやっていけるかな」という声も出ているので、この地域計画の策定に向けたその調整・協議の場ができることによって話し合いを持つことができるので、できるだけそういった農地の集約化に向けた調整をしていきたいというような声が出ているといったようなところです。そうした中で「色んな国の補助事業とかこういう事業があると良いよね」というような声も実際聞かれつつあります。ですので、地域計画に関してはこれから徐々に対象の方を広げて話し合いをしていくというような状況になってございます。

伊藤委員長：はい。ありがとうございます。

佐藤代表：今片倉係長の方から意見ありましたけれども、私たちのような棚田の地域では、実際に田んぼを作ってお願いするというようなことはあるんですが、「裏のあそこはダメだよ」と。「表の平のところなら良いけども、裏のあそこはダメだよ」というようなことがあるんです。平らな田んぼは３０ｃｍぐらいのクロ―で刈って歩けば良いんですが、私たちみたいな棚田の田んぼは草刈り機械で一生懸命やっても、往復２回、それでも届かない時は田んぼに入って刈り上げてやるような農地ですので、誰も引き受けてくれる人がいないんです。むしろ、そういうところはやりたくないという方が非常に多い状況ですから、なかなか農地を守っていくということは本当に大変ですけれども、何とか守っていきたいなと思っております。

千葉監事：いいですか。

伊藤委員長：どうぞ。

４　意見交換（栗原市：峯地区環境を守る会、若柳蓬田集落協定）

千葉監事：峯地区環境を守る会の監事の千葉でございます。今の話の流れで、たまたま峯地区の方ではですね、２０年程前、１町区画の基盤整備すでに終わった地区でございます。そういった地区でもですね、さっき会長が言いましたように、役員の平均年齢が約７０歳ということで、これから何年間維持管理できるかというところが一番大変なところでございます。また、基盤整備に伴いまして、実は５年を目処に法人化というような約束の中で進んできたんですけれども、なかなかその法人化にはまだ至ってないというような状況で、これはその若柳地区総じてそういった方向で、法人化なったところがまだ４カ所５カ所ぐらいということでございまして、私たちのところも法人化に向けて色々研修から勉強から繰り返しているんですけれども、実際いざとなるとなかなかそこに至ってないというところです。今、一番の問題は担い手の平均年齢が７０歳近いということで、あと５年もするとほとんど担い手の受けかねないということでございますし、さっき佐藤代表からもありましたけれども、まず今の４０代３０代の方々はほとんど営農意欲がないということですね。今の７０代、８０代の方々は、やらなくなれば当然他の方に頼みたいというような意向が多いようでございます。そういった中でこちらも同じように受け手の方が満杯の状態でありまして、そういった意味で、県あるいは国で進めている法人化ということでお話をいただいていますが、その法人化に替わる別な形でなんとか営農継続できないかということも今色々考えておりますので、そういったところを何か良い方策があれば教えていただきたいと思います。以上でございます。

伊藤委員長：はい。ありがとうございます。

山﨑委員：恐らく法人化を検討し、そこに活路を見出そうとしていると思いますが、事務作業とか人材の問題とか、経理とか色々大変な部分はあると思いますが、法人化の一番のネックは何でしょうか。

千葉監事：まずもってうちの方は、他の地区のように野菜とかを組み合わせているんじゃなくて、田んぼプラス転作で大豆をやっている状況です。例えば年間雇用した場合に、その方々にきちんとした給与が払えるかどうかが一番問題であります。

山﨑委員：安定した雇用ということですね。

平田委員：いずれの地区でも大変素晴らしい取組をしていらっしゃって、大変敬服いたしておるところでございます。いずれ二つともですね、やはり高齢化の課題を抱えてらっしゃるということを先程から話題になっておりますけれども、前提のすいません質問、基礎的な質問で恐縮なんですけど、それぞれの地区は、かなり農地の条件が違うようなのですが、この事業では草刈りとか水路補修ですとかといった農地保全、あるいは資源向上とか棚田の保全とか色んなことをやってらっしゃるわけですけれども、農地の基本的な機能として耕作をするというところがあるわけですけど、皆様の地域では耕作をする方と、この事業

に参加していらっしゃる方というのは一緒でしょうか。それとも農地の所有者として参加してらっしゃるのか、もしかしたら峯地区の方はかなり基盤整備が進んでいて、担い手のところに利用権設定がされていて、耕作は担い手の、例えば法人の方がやっているけれども、こちらの各種、例えば花を植栽されたりとかって要件設定した法人の方がおやりになるようなことを想像できないんですけれども、消費者の方がこの事業に参加してやってらっしゃるのかとかですね、そういった基礎的な質問をさせていただければと思います。

千葉監事：今構成メンバーが６５人ですけども、その中には半分以上の方が田んぼ頼んでいる方々です。こういった方もそういった作業には従事していただいております。身体的に問題なければそういったことで、さっき言いましたように８０歳以下であればそういった草刈りとかそういった作業には参加していただいております。

平田委員：そうすると、あくまでも農地の所有者の方が参加するということになるということでございますね。

伊藤委員長：会員は６５人です。その内農地を所有していない人、農家じゃない人はいますか。母体が峯地区の自治会ということでしたが。

千葉監事：本当にわずかですけどもいますけども、そういった方々にも作業には参加していただいております。

伊藤委員長：ほぼ全員というわけではないけど、大半が農地を先祖伝来で受け継いでやっているという理解で良いですね。６５人ぐらいで６８町歩だから、デコボコあるにせよ会員１人あたり１町歩ぐらいの面積で米を作っている。もう少し言えば、基盤整備で峯地区の場合には１町歩区画が結構多いから、机の上の算術上では１人平均１枚の田んぼを持っているという理解で捉えれば、さほど大きく間違えはないということと思います。そして、峯地区には４カ所の団地があります。あまり高低差が無ければ、大きいところはたぶん一つの地区で３０町歩ぐらいの面積がある。ただ、皆さん７０代を超えている人もたくさんいるけど、その中で半数の３０人ぐらいが米を作ったり大豆を作ったりしているので、そこはまだ５年、１０年は続くかもしれない。そこで「法人化しろ」と言われても、大豆の生産で言えば面積払いである程度の収入はあるけれども、数量払いの収量をグッと上げて、面積払い以上の収入を増やす取組はなかなか簡単に出来そうにない。収入・収益のことを考えれば、法人化も簡単にはいきそうにない。そういう理解で良いですか。

千葉監事：はい。

伊藤委員長：そこで、例えば３０町歩を１人か２人でやれる計画は机の上では描けるけれど、そう簡単にいかなくて、まだまだ自分の体が動くうちは農作業をやりたいという人がいる

ので、規模を拡大して効率良く機械作業で転作も米作りもやるから貸してくれと言っても、そんな簡単に貸すとはならないというのが現状ということですね。

　そういう意味では、時間が経てば自ずと「もうだめだ。もう体の自由が効かなくなったから、誰かやってくれ」という人が次々出るけど、そのときにやれる人がどれだけいるか分からない。例えば、６８町歩あるわけだから、仮に米だけ作っても、反収で何俵が獲れるかによっても違うけど、大雑把に言えば、７，０００万円、８，０００万円ぐらいの売上があって、そこから経費を引けばこれぐらいの所得は残りそうだということは計算できるけど、本当にそれで何人で米とか大豆、野菜を作っていけるのか、そこはまだまだ分からない状態だということですね。

千葉監事：基本的にはそうです。ただ、まずもって若い方々がやりたがらないというか、今の米価と肥料・農薬・燃料の高騰で、どう考えても合わない話なんです。今、高齢の方が持っている機械を使い終われば、次の更新はないなという方も結構います。そういったところで峯地区だけの法人化は難しいかなと思っています。うちの地区では、下畑岡地区の基盤整備で２１０くらい、大きく四つの集落があるんですけど、もっと広域的な中での法人化を見ていかないと、なかなか将来に向けて作ったけども、もう５年ぐらいで頭打ちだということになりかねないと思いますので、その辺ですね。なお慎重に検討していきたいんですけども、その慎重に検討する時間がもう無いというようなことでございますので、そういった地区でございます。

伊藤委員：すみません。法人化についてちょっとお聞きしたいんですけども、法人化を考えた場合に、地区内の役員を考えているのか、あとは、新規参入者とか、新しい地区外の人を入れた法人化は考えたことはないのでしょうか。

千葉監事：両方考えていますけど、まだその前の段階で、どういった形態の法人があるかということを色々勉強中でございまして、その中でこの地区に何が一番合っているのかというところを模索中でございます。当然地元の人間で賄えないような状況であれば他から雇っていかざるを得ないというふうにも思います。

伊藤委員：先程、年間通しての雇用は大変という話はされましたけども、今回先程説明を受けたように、地域計画で１０年後の目標地図を改めてというか真剣に考える時期なのかなと思います。本当に将来自分たちも高齢化する中で、やっぱり改めて真剣に地図を作成するのがまず一番重要かなって思います。色んな課題はあるんですけど、やっぱり地域の皆さんで真剣に話し合っていくのが一番なのかなって。例えば米と大豆って仰いましたけども、大豆でも加工もできるし、色んなことができると思いますので。

千葉監事：確かに私もそのように考えています。やっぱり６次産業のことを考えながらやっていかないとなかなか年間雇用というのは難しいかと思います。ただですね、さっきも言

いました国では「法人化、法人化」ということで「年数切ってそこにいかないとその次は無いよ」と。特にこの対策の関係で、該当しなくなると集団大豆も作れなくなるということになってきますので、今うちの方は営農組合という組織ですけども、何とか法人化と営農組合の中間ぐらいの位置付け、そういった形態を考えていただけないかとも思っております。これ私個人の考えでございます。

伊藤委員長：はい。ありがとうございます。関連して御意見とかないですか。

後藤専門委員：すいません。加美よつば農協の後藤といいます。何処も悩みは同じだなと思いながら聞いていたんですが、まず、中山間地の問題と基盤整備が進んでいるところは分けて考えなければならないと思いました。基盤整備進んでいるところでも問題があるということ良く承知しております。おそらく基盤整備に掛かった補助率の問題で集積要件が掛かっているんですか。２１世紀型とか昔ありましたけど。それもあってのことですかね。

千葉監事：集積要件もありましたね。

後藤専門委員：やはり集積要件が掛かっているんですか。分かりました。ということであれば、法人化が一つの提案でしょうし、ただ以前はもっと緩くて、集落営農の任意団体でも集まっていればクリアという要件もあった気がするんですが、その辺ちょっと昔のことなのでよく覚えてないというのがあって確認したかったのが一つ。

　あと、地区、小学校区単位なのか分かりませんが４地区があると言っていました。そこで２２０ｈａぐらいあって、その内の６０ｈａぐらいということでございまして、うちの集落も同じで、８０ｈａぐらいのところが七つぐらいあって５６０ｈａの小学校区単位ですが、ここはもう次の段階に進まないとダメだと思っています。小学校区単位での改善組合が先なのか法人が先なのかはありますが、そこに利用権設定するというところまで進まないともう無理だという。７０から８０ｈａでも後継者が育たないということであれば、もうちょっと大きな括りで土地を集積して、土地の分配をする仕組みを作っていかないと、もう無理だと思っています。私のところも５反と１町の基盤整備終わった地区ですけども、２０年前はそれで良かったんですが、もう集落の範囲を超えて農地利用を考えないとダメな時期にきているんだろうなと思いますので、差し当たり基盤整備の補助率をクリアするためのことをやらなければならないと思うのですが、その次の段階でもっと大きな視点が必要だろうなという気がしています。そうでないと乗り切れないですよね。恐らく。　今の米価・肥料高騰の中では、そういう展望も開く必要があるんだろうなと思います。これは行政や農協がどれほど関わっているか分かりませんけが、そこへの描き方に懸かっていると思いますので、地区の皆さんと共にその絵を描いていただければ良いのかなと思いました。

伊藤委員長：はい。ありがとうございます。

４　意見交換（栗原市：峯地区環境を守る会、若柳蓬田集落協定）

伊藤委員：すいません。もう一つだけ。地区の話し合いの中に女性は入っていますか。

丸山会長：今のところ残念ながら入っていません。

伊藤委員：是非入れてください。

伊藤委員長：はい。大変貴重な御意見ありがとうございます。そうですね、伊藤委員はそういった活動を何十年もやってきていて、地域の合意は、男性の意見だけというのはやはり片手落ちだと。全員のことを考えると女性の意見はとても大事で、そこから我々男子は色々気付きを得ることが多いので、是非今後の集落のことを考えるときには、女性の意見や子どもの意見も入れると本当に良いと思います。

　先ほど後藤専門委員から、峯地区について色々御意見をいただいたのですが、後藤専門委員が活躍されている加美町は中山間地域もたくさん抱えているので、蓬田集落の方に棚田について何かコメントはありませんか。

後藤専門委員：私の地区もこういうところを実は抱えていまして、中山間地域等直接支払ですよね。中山間地の直接支払の地区においてはやっぱり同じ問題抱えています。これは私の考え方ですが、集落の中だけでの解決は無理じゃないかなと実は見ています。要するに、この中で何かを作りながら、作物を作りながら経営を維持していくことは大変ですよね。確かに観光や６次産業などで活路を見出しているところもあると思います。観光名地になっていっぱい観光客が来てというところがあると思いますが、それを全国各地でできるわけがないという思いもあって、であれば、むしろ経営をしてもらう人が、隣の集落の中山間地を抱えてない集落なのか、中山間地抱えている集落なのか分かりませんが、その辺を巻き込んでいかないと集落内だけで解決しようとしても恐らく無理だというふうに、私の地区を見ても思います。なので、これで全て解決するとは思いませんけど、今から考えていかなければならないのは広域化だと思っています。広域化である程度の問題を解決化しなければならない。あとは組織づくり、もちろんリーダーも作っていかなければならないということがあると思いますが、そういう意味で、先程も誰かが言っていましたが、地域計画の中に役場や農協など関係団体が本気になって入っていくと。地区の人だけでは考えられない問題を解決するのが役場や農協のはずなので、そこが本気になって一緒に考えていくという姿勢が必要だろうなと私は思いますけどね。以上です。

伊藤委員長：はい、ありがとうございます。今の話に関連して、鳴子の米をずっと牽引してきた上野専門委員も御意見があるかと思いますので。いかがでしょうか。

上野専門委員：そうですね。うちの方は、整備したほ場と非ほ場の両方があって、面積的には総合的に言うと大体５０から６０ｈａで、規模的には小さいです。ただその中でたまたま世代交代というか年齢構成が上は７０から始まって下が今２０代までで、ある程度段階的

な世代が中間にいるので、最終的に地域づくり・担い手というよりも、もう最初から地域づくり生産組織という考え方でなくて、この集落を例えば２人なり３人で水稲なり野菜なり畜産なりで経営していくという考え方に切り替えていかないと無理だということを話しています。

たまたまうちの隣の息子が茨城県に就職して、結婚して子ども２人連れて去年Ｕターンしてきたんですけれども、新規就農という部分だけでなくて、小さい時から農業と集落との関わりを大切にしながら、郷土愛的な部分も含めてやっていかないと、経済性だけで農業をするというのはなかなか難しいと思いますし、特にうちの方では、農地の保全というな考え方だけではなくて、自然環境の保全ということで、うちの方にもため池があって、その周辺でホタルが生息していまして、ゲンジ、ヘイケ、ヒメホタルなどという形で４種類くらいのホタルが生息している地域です。よくよく見るとこの棚田のため池なんかは非常にそういった環境に適しているのかなぁと思います。

うちの方は典型的な中山間地域なのですが、米プロの関係で低アミロース米の「ゆきむすび」を作っていて、ＪＡには全然卸していなくて、直接東京の方のおにぎり屋さんに出しているんですけど、農協に出すと１２，０００円なのが、業者に出すと２４，０００円で、取引しながら次の世代を育てていかないと、なかなか切り替える、もしくは法人化ということで進められるかというと、色々権利関係の整理から借財の返済から色々あるので、一気にはいかないと思うんですけど、長い目というかある程度計画を立てながら地域づくりをしていく方向に進んでいった方が良いのかなと。なかなか難しい点はありますが、そういった観点で進めていった方が良いのかなと考えています。

伊藤委員長：はい、ありがとうございます。時間が随分と押してきはじめてるいのですが、遠藤委員、何か御意見等あればお願いします。

遠藤委員：峯地区さんと蓬田集落さん両方に伺いたいんですけれども、尚絅学院大学とか、あと子供会の皆さんと活動されていますけれども、そういったときに、若い世代の方々とやり取りしたり、コミュニケーションを取ったり、活動の後に感想を聞いたり、次の活動の連絡をしたりというときに、メールやＳＮＳを使ったりすると画像も見れたり、素早くお返事できたりというのがあるかと思うんですけど、比較的ＬＩＮＥは皆さんお使いになっている、地域の方でもお使いになっている方が多いかなと思うんですけれども、若い世代の方々とコミュニケーションを取ったり、次の活動に繋げたり、「良かったね」とか「美味しかったね」とか共有していく上でそういったＳＮＳって有効だと思うんですけれども、その活用状況はいかがでしょうか。ＩＴとかＳＮＳに関連して、現状と「今後こうしたい」というのを教えてください。

伊藤委員長：佐藤代表いかがでしょうか。

佐藤代表：はい。今、尚絅学院大学の学生さんたちと交流をさせていただいて３年ほどにな

るんですけれども、今年は３年生が入ってきたものですから、今まで２年間一緒にやってきた生徒が卒業したので、今度新しく入ってきた生徒たちが、まだそこまでＬＩＮＥとかそういう今流行りの連絡方法は遠慮して連絡はしておりません。ただ、生徒たちには今年も１　０月に稲刈りの体験と、あとはサツマイモとかエダマメの収穫作業に来ていただいたんですけれども、この日はあいにくの雨だったんですが、カッパを着ながら、写真にもありますように、一生懸命やっていただきました。「どうだ？」って言うと「楽しかった」「面白かった」とか、お世辞かどうか分かりませんけれど、そういう意見はいただいております。だからこういう生徒たちが社会に出てから「こういう経験したよ」ということを思い出してもらえれば、私としては大変嬉しく思っております。今のところはそういう状況ですね。

伊藤委員長：はい、峯地区はいかがでしょうか。

丸山会長：私の方もＬＩＮＥとかそういうのはちょっとしてないですけど、子どもたちとのふれあいだとやっぱり生き物調査とか、ミニ運動会などをやっているわけでございます。本当に少子化で小さい子どもが１０何人ぐらいしか居ない状態でございます。あとは若い人とは視察研修ですか、そういうのも取り組んでやっております。以上でございます。

遠藤委員：ありがとうございます。

伊藤委員長：はい。そろそろ時間になりますが、どうしてもまだ聞きたいことや意見があれば一つ、二ついかがでしょうか。

後藤専門委員：全く同じなんですけど、後継者がなかなか育たない。私の集落がそうなんですが、一つだけ希望といったらおかしいですが、役場を退職する人とか農協を退職する人が実は今中心です。会社を退職して６５歳とか７０歳まで勤める方もいらっしゃいますが、そういう人たちは次々居ることは居るんですね。そういう人たちしかとりあえずないのかなという思いもあるんですが、その辺すらもなかなか戻ってきませんか。

伊藤委員長：よく定年帰農っていう言葉でいわれますね。

後藤専門委員：帰農っていうやつですね。いわゆる。

伊藤委員長：今まで同じ集落に居ながら別な仕事をしていたが退職して時間ができた。そういった人たちで蓬田集落や峯地区の活動をやってくれそうな人はどれくらいいますか。

千葉監事：今、定年延長ということで、普通でも６５歳、企業によっては７０歳までＯＫというところもありまして、なかなか定年といって直ぐに農家に従事してもらえないという

状況でございます。

伊藤委員長：蓬田集落の方はどうですか。

佐藤代表：今のところは一切ございません。ですから、現状のままで１年でも２年でも１日でも長く皆さんと共にこの棚田を守っていきたいなと考えております。

先ほど直接支払で御報告しましたけれども、良い点はこのフォトコンテストを実施したおかげで、一昨年、ＫＨＢから「是非蓬田棚田を取材させてください」ということで、「チャージ」という番組でたった３分ほどだったんですけれども「空旅」という番組で、空から蓬田棚田を紹介していただきましたこと、本当に大変嬉しく思っております。常に目線で見ているものを上から見ると、また見事に綺麗な画像を見させていただいて、本当に嬉しく思っております。以上です。

伊藤委員長：はい。ありがとうございました。よろしいでしょうか。そろそろ時間になりましたが、今日皆さんのお話を伺いながらですね、特にまとめなきゃいけないということはないのですが、今、佐藤代表も言ったように、現状を維持しながら少しでも長く活動をして、その中で誰か担い手が出てくれることを期待する、皆さんの思いはたぶんそうなんだろうと思います。これは私もよく分かります。ここ数年、農林水産省の表彰事業で、全国各地の優れた取組をしている経営の人たちの資料を見る機会があって、その中に「村づくり」もあるんですね。ただ、天皇杯や内閣総理大臣賞を受賞している人たちの中にも、「もう続かないよ」と言ってくる人たちもいます。

その一方で、自分たちの集落でも「人はいるけど、なかなか定年が７０歳まで延長になって一緒にやれる人がいない」、「自分たちが８０までやるしかない」とか、そんな話になりかねないんですが、本当にそうだろうかと１度足下を点検してみる必要があるのではないかと思います。というのは、随分前の話ですが、離村して農地は売らずにそのまま親戚に貸していた人のお孫さんが「農業をやりたい」と言って、農地を預けた親戚のところに修行に来て、そのまま営農を再開したケースに出会いました。挙家離村していても次世代の遠縁の若者がその農地を耕す可能性だってあるんです。農業に興味・関心を持つ若い人って全くいないわけではない。ここで自分たちの辿ってきたことを思い起こせば、親からは「農業は儲からないから違う仕事に就きなさい」と言われて育てられ、一方で親世代は兼業しながら高価な機械や肥料・農薬を使って先祖伝来の田んぼや畑を１人で耕作し続けて、それでも歳を重ねて気が付いたら後継ぎがいないっていうのは当たり前の話です。そこで「誰かやってくれ」って言われても、それは自分たちがそうやってきたんだから仕方がないと。それでも自分たちの農地とか農事遺産、地域資源を残していきたいならば、やっぱり発想とか考え方を変えなきゃいけないですよね。今のままでは農業をやってくれる人は出てこないですよね。

今日は、委員の先生たちから「こういうやり方はどうですか？」という話もありました。結局自分たちの地区に人がいなければ、集落以外の人を巻き込んで活動を続けられるよう

な工夫も考える必要がありそうです。自分たちの地域で５年先農業やっていると思う人、１０年先農業やっていると思う人は誰だろう、お酒を飲みながらでも良いですから皆さんで集まって話したときに、少しずつ自分たちの地域の資源とか自分や人のことも含めて人的資源の様子も見えてきます。そこにお母さんたちの意見や子どもたちの意見も取り入れて考えてみる。その結果、本当に誰もいなければ地域や集落の農地、農業は誰か外の人に任せるしかない。外の人に任せることに不安も出てくると思います。しかし、１２年前の東日本大震災の津波被災地では現在、１００町歩を超える規模の法人経営がたくさん生まれています。その中には、地域の担い手だった人が亡くなったので、農地の出し手だった人たちだけで法人を作って頑張っている人たちもいます。彼らも現在は平均年齢７０歳を超えていて後継者問題に直面していますが、法人化直後に宮城県の農業大学校に行って「うちで働かないか？」「自分たち辞めた後１００町歩の経営ができるよ」とリクルート活動をして、現在はその地域とはまったく関係のなかった２人の若者が働き続けてくれています。外部に頼ることも出来ないわけではないという事例です。５年先１０年先の地域の農地や資源を維持することを考える際の優良事例は各地にあります。それらは、市役所や県に問い合わせれば教えてくれます。そういうことを着実に実行していくのが大切ではないかと思いました。

最後に、今日の意見交換では、若柳蓬田集落協定の中山間直接支払と峯地区の環境を守る会の多面的機能直払のどちらも、きちんと制度を活用しながら現状を維持している、特に草刈りをする上で、これらの直払がしっかりと効果が出ていることを確認させていただきました。そういう意味で、今後は両地区の取組が、今日出た意見も踏まえながら、更に上手く発展していくことを祈念いたしまして、意見交換を終わらせていただきたいと思います。貴重な時間どうもありがとうございました。

司会：伊藤委員長、ありがとうございました。本日の意見交換の内容を踏まえまして、今後県におきましても農村振興施策に役立ててまいりたいと思っております。

なお、本日の意見交換会の議事録は、後日公開をいたします。事前に事務局で作成したものを委員の皆様にメールまたはＦＡＸで送付をいたしますので、内容の御確認をいただければと思っております。御確認いただいた上で公開をいたしますので、御協力の方よろしくお願いいたします。

それでは、以上をもちまして、若柳蓬田集落協定様並びに峯地区環境を守る会様との意見交換会を終了いたします。皆様、本日はお疲れ様でございました。ありがとうございました。

委員の皆様は、お荷物持っていただきまして、バスの方へ御移動をお願いいたします。

５　現地調査（栗原市：若柳蓬田集落協定）

（若柳蓬田集落協定の棚田付近より）

事務局：それでは、「若柳蓬田集落協定」の佐藤代表より御説明をいただきます。よろしくお願いいたします。

佐藤代表：本日はお疲れさまでございます。あいにく雨が降ってきましたが、本来であればお天気がいい日は綺麗に見えるんです。あと、真正面から見える場所もあるんですが、バスが入れないものですから、今日は一番東側から皆さんに見てもらいます。
　場所的にはあそこに看板が２枚立っていますけど、あそこに旗があります。あれは私たちが作った蓬田地域の棚田集落という看板が立っています。あそこが始まりで、上に鉄塔がありますね。あそこまでなんです。あそこから西にずっといくと下に家があります。そして上にも家があります。あそこまでが協定農用地です。

平田委員：あの旗より左側ですか。

佐藤代表：あのこんもりした山がありますけど、あそこに排水路があります。その道路なりに家の下まであります。

平田委員：向こう側ですね。こっち側ではないんですね。

佐藤代表：こっち側ではないです。向こう側です。上にはこんもりした山がありまけど、あそこにも農道がずっと上の家のところまで続いています。それで上の鉄塔とちょっと下に青く見えるところがあるんですけどあそこに５枚ほど、あそこは協定の参加者ですけど、始める時から耕作放棄地になっていまして、協定に入るか聞いたら、「私たちの家では草刈りはできませんけど、刈っていただけるなら参加します」ということで組合員にはなっています。その部分は私たち協定員が年に２回、だいたい１７人くらいで共同作業ということで草刈りをしています。だいたい５反分くらいあるかと思います。今年は県の職員さんもきていただいて草刈り作業をお手伝いいただきました。

伊藤委員長：あの法面ですと草刈りが大変そうですね。法面だけで４、５ｍくらいありそうですね。

佐藤代表：もっとあると思います。

伊藤委員長：傾斜も急だろうし。

佐藤代表：それでも幸いなことに、ここで草刈りをしていて、怪我をした方は居ません。やはり滑る時はあります。

５　現地調査（栗原市：若柳蓬田集落協定）

江畑委員：あっち側の道路から見ると綺麗ですよね。

佐藤代表：帰りに御案内します。一番西側のはずれですね。

江畑委員：今朝は靄で、ライトを付けないと見えないくらいでしたね。

佐藤代表：今朝はそうでしたね。

平田委員：先ほど大学生とコラボしているというお話がありましたけど、長野県千曲市の姨捨の棚田では、棚田のオーナー制度をやっています。出資をしていただいて田植えとかを体験できるようになっています。米の売り上げよりもそういった体験を通じて維持に必要な費用を捻出しているようです。ここは仙台も近いですし、そういったことも考えられないかなと思うのですが。

佐藤代表：ただ、私たちはそういったＰＲができていないんです。例えばインターネットとかＳＮＳとかできる人がいないんです。そういう人がいればもっと発信していきたいです。

伊藤委員：そういうのはこういう公的機関にお願いしてはどうでしょうか。

佐藤代表：いろいろ市役所や県の皆さんにはお願いしているんですが、なかなか、頼む方としてはお願いばかりだと心苦しいところもあります。

伊藤委員：そういうのに先ほどの大学生とかを活用するのもいいと思います。

佐藤代表：なかなか大学生も参加したばかりなので、そこまではお願いしていないです。

平田委員：条件は厳しいですけど、逆にこういうところは他にないですからね。希少性があるので上手くいけば活かせると思います。

佐藤代表：築館に栗原中央病院という総合病院があるんですが、そこの先生が農業を体験したいということで、ぜひ行ってみたいという話が来ています。１１月１８日に収穫祭があるよということを伝えたら、行けたら行きますということで、もしかすると繋がりができるかもしれないということで期待はしています。

伊藤委員：そういうことから後継者が見つかるかもしれないですね。

佐藤代表：お医者さんの子供ですからそれは難しいかもしれません。

伊藤委員：お医者さんの子供に限らなくて、そういう取組をしているうちに新規就農者が見つかることもあると思います。

事務局：もしよろしければ、他に御質問等がある方はいらっしゃいますでしょうか。では、遠藤委員お願いします。

遠藤委員：棚田米とかは販売していないんですか。

佐藤代表：棚田米は個人的に買いに来た方には売っています。あと、棚田米はフォトコンテストの表彰式で特選賞には３０ｋｇ、その他に２０ｋｇ、１０ｋｇ、５ｋｇと賞品として棚田米というシールを貼って出しています。それ以外ではどこまで出しているというのはありません。

遠藤委員：例えば、この地域の人は「棚田米と名乗っていいよ」として個別販売するとかはないんですね。他の地区では棚田米で販売しているところもありますよね。私も応援で買ったこともあります。こちらでも作っていれば買いたいなと思いました。

佐藤代表：作っていますよ。あと、フォトコンテストで特選賞になれば米３０ｋｇ貰えますよ。その他に野菜とレンコンの詰め合わせも出しています。レンコンもこの棚田で作っています。

平田委員：この綺麗な環境、景観を守ってくれている農家さんの棚田米ということであれば多少高くても買う人はいると思います。

佐藤代表：なかなか私たちはＰＲが下手なものですから。何かこの先にあそこに棚田米があると皆さんが機会あったときには、ぜひ。

遠藤委員：レンコンの収穫はいつ頃ですか。

佐藤代表：もう始まっています。

遠藤委員：レンコンってスーパーで買うと結構いいお値段しますよね。

佐藤代表：ここでは、伊豆沼レンコンといって出しています。結構需要があって掘りたてはもうないそうです。御用命があれば、お取り次ぎします。

遠藤委員：需要があるのであれば皆さんに買っていただければと思います。

５　現地調査（栗原市：若柳蓬田集落協定）

事務局：他に御質問がある方はいらっしゃいますでしょうか。いなければ雨脚も強まってきましたので、以上で現地調査を終了させていただきます。あと、帰りに佐藤代表に先導いただいて、バスの中から協定農用地の反対側を見ていただければと思います。それでは、以上で現地調査を終了させていただきます。佐藤代表ありがとうございました。